

読書感想文集
読書感想画

64

販売見本

2024

奈良県学校図書館協議会

版式设计

「読書の大切さ」

奈良県学校図書館協議会 会長 浅井信成

今年も青少年読書感想文奈良県コンクールには、奈良県児童・生徒の多くの作品が寄せられました。一つ一つの作品の中に、本との出会いがあり、登場人物との出会いがありました。ここに、入賞された皆さんの作品を掲載させていただきます。ただ、読書の楽しさを多くの人と共有できることを嬉しく思います。たくさんの人たちが本との出会い、登場人物との出会いを通して、その感動を感想文や感想画として応募してくれました。その中から、皆さんの作品が優秀であったと選ばれたということです。皆さんの書かれた感想文では、「おもしろかった」「楽しかった」「かわいそうだった」だけではなく、読んだ本の主題に対して自分の意見を明確にし、自分のこれまでの経験や体験と照らし合わせて書かれていました。読書感想文を書くということ、言葉を紡ぐという作業は大変難しく、時に苦しいこともあります。でも、皆さんが読んだ本の感動を誰かに伝えたいという熱い思いや読んだ本から得た知識や考え方、価値観、ひいては生き方までも分析・吟味する作業から得たものはとても大きいと思います。

文字であり絵であり、何もないところから一つの作品を生み出すことは大きな喜びであり、大きな力になると思います。今回の受賞の喜びを忘れずに、これからたくさんの本との出会い、様々な知識を吸収しつつ、震えるような感動を文字や絵で伝えていってください。読書をするにより人生が豊かになる、といわれています。人生を豊かにするために、知識を増やし、見識を広げ、想像力を増し、語彙力を増やし、コミュニケーション能力を向上していつてほしいと思います。読書とは、作品に浸り、自分の生き方を作品と照らし合わせ、本を読みながら、自分の考えを行きつ戻りつさせ、本の中で、他人の人生を追体験してみたり、辛い感情に共感したりしてみることは、読み手の心を大きく育てる力になることではないでしょうか。これからも本を読んで自分が思ったこと、動かされた感情、新しい気づきを表現し、読書の楽しさ、素晴らしさを体験し、より深く読書し読書の感動を表現することを通して豊かな人間性や考える力を育んでいってほしいと思います。

最後になりましたが、本コンクールを開催するにあたり、ご指導ご協力賜りました奈良県教育委員会並びに審査いただきました奈良県学校図書館研究会の先生方、奈良県高等学校図書館研究会の先生方、奈良県高等学校美術・工芸教育研究会の先生方、奈良県国語研究会の皆様、図書館情報館の皆様、毎日新聞奈良支局の皆様にご心から御礼申し上げます。

目次

第七十回青少年読書感想文奈良県コンクール

奈良県教育委員会賞

◇小学校低学年の部

課題読書 『ごめんねでてこい』のかんそう

自由読書 やさしさでいっぱい

奈良市立鳥見小学校

二年

能登 千遥

1

大和郡山市立郡山北小学校

一年

宮井 日彩華

1

◇小学校中学年の部

課題読書 わたしにもできること

自由読書 ためいきと笑顔

天理市立樺本小学校

三年

矢尾 花香

2

奈良市立登美ヶ丘小学校

三年

尾内 ふみ

2

◇小学校高学年の部

課題読書 わたしもきつとうそをつく

自由読書 『みえるとかみえないとか』を読んで

葛城市立忍海小学校

五年

飯田 愛梨

3

大和郡山市立筒井小学校

五年

好田 陽大

4

◇中学校の部

課題読書 「GO FOR YOUR DREAM」

自由読書 私はこう生きたい

生駒市立緑ヶ丘中学校

三年

山地 奏花

4

奈良女子大学附属中等教育学校

三年

北村 優季

5

◇高等学校の部

課題読書 ただ、やる

自由読書 『汝、星のごとく』を読んで

奈良県立橿原高等学校

一年 瀧本 琉偉・

7

奈良県立桜井高等学校

二年 乾 結衣・

8

毎日新聞社賞

◇小学校低学年の部

課題読書 ぼくがおもう「おおもの」

自由読書 かがやけいのち！みらいちゃん

近畿大学附属小学校

一年 毛利 太賀・

9

桜井市立桜井西小学校

二年 和井内 千尋・

9

◇小学校中学年の部

課題読書 音とひびきのふしぎ

自由読書 『しゅくだいクロール』を読んで

大和高田市立陵西小学校

三年 中垣 昂大・

10

智辯学園奈良カレッジ 小学部

三年 松井 心花・

11

◇小学校高学年の部

課題読書 「誰かのために」

自由読書 『私はなりたい』

奈良市立鳥見小学校

六年 村戸 蒼唯・

12

奈良市立鳥見小学校

六年 木口 依吹・

12

◇中学校の部

課題読書 夢

自由読書 成瀬の生き方から学んだこと

葛城市立新庄中学校

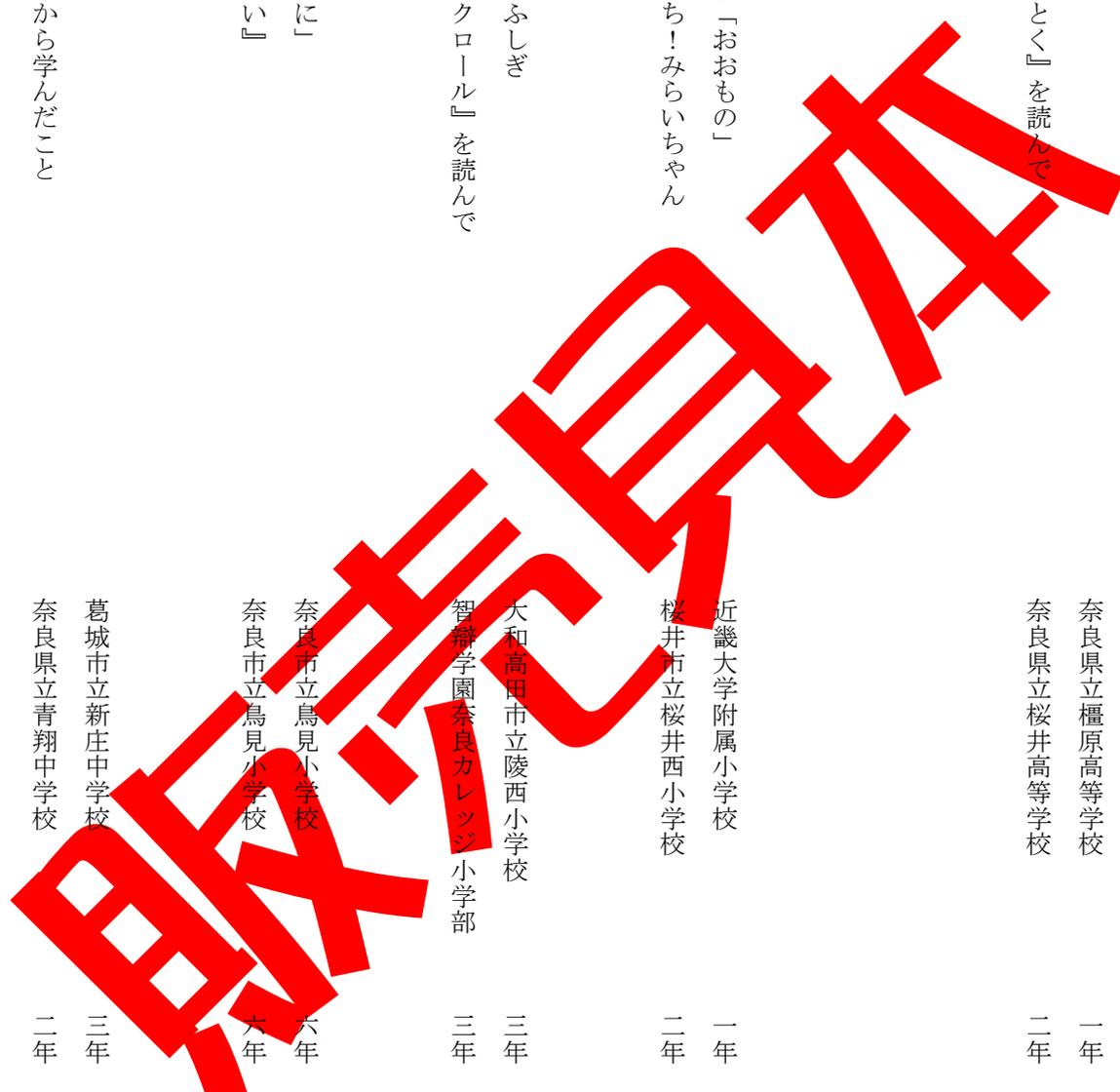
三年 中山 楓那・

13

奈良県立青翔中学校

二年 山田 和奏・

14



◇高等学校の部

課題読書 つながる未来
自由読書 『死にがいを求めて生きているの』を読んで

奈良県立奈良北高等学校

二年 角谷日菜子・・・・

16

奈良県立高田高等学校

二年 渡部 琳・・・・

17

奈良県学校図書館協議会賞

◇小学校低学年の部

課題読書 『アザラシのアニュー』を読んで
自由読書 おいしいうれしいマドレーヌ

奈良育英グローバル小学校

一年 藤村 萌奈・・・・

18

大和郡山市立郡山南小学校

一年 池上 史葉・・・・

18

◇小学校中学年の部

課題読書 あなたの行動が世の中をかえる
課題読書 『じゅげむの夏』を読んで
自由読書 たからものような大切なできごと
自由読書 気持ち良くすごすための取扱説明書

奈良市立登美ヶ丘小学校

三年 小幡 優仁・・・・

19

奈良市立三碓小学校

四年 柿坂 くるみ・・・・

20

葛城市立新庄小学校

三年 大脇 莉子・・・・

21

奈良市立青和小学校

四年 田積 芽依・・・・

21

◇小学校高学年の部

課題読書 強い心
課題読書 心の豊かさが救う未来
自由読書 誰でも明日はかがやける

生駒市立生駒台小学校

五年 辰巳 実祐・・・・

22

智辯学園奈良カレッジ小学部

五年 大林 莉々果・・・・

23

天理市立櫛本小学校

五年 矢尾 愛葉・・・・

24

◇中学校の部

課題読書 希望のひとしずくと私

自由読書 平和な世界をつなげるために

奈良女子大学附属中等教育学校

一年

村上 心映

25

大淀町立大淀中学校

一年

米田 茉央

26

◇高等学校の部

課題読書 「信じる」

自由読書 世界一孤独なクジラたち

奈良県立磯城野高等学校

二年

佐藤 友姫

27

奈良県立香芝高等学校

三年

鈴木 夏菜

28

審査概評

. 30



第四十二回読書感想画奈良県コンクール

優秀賞

◇小学校低学年

指定読書 おばあちゃんとルイージ

大和高田市立磐園小学校

一年 泉川 大和……

31

◇小学校高学年

指定読書 クモを追いかけて

斑鳩町立斑鳩小学校

五年 伊佐地 由芽……

31

自由読書 世界を花いっぱいにする

桜井市立城島小学校

五年 井田 楓夏……

31

◇中学校

指定読書 Respect for life

奈良教育大学附属中学校

二年 天方 美櫻里……

32

自由読書 楽しい時間と深い紅色のジャム

奈良教育大学附属中学校

一年 大西 叶甫子……

32

◇高等学校

指定読書 変化と継承

奈良県立奈良高等学校

一年 石川 紡……

32

自由読書 退屈

奈良県立磯城野高等学校

二年 供田 理子……

32

優良賞

◇小学校低学年

指定読書 こたろうがかたつむりをにしているにした！！

自由読書 よろこびのひかり

平群町立平群南小学校

一年

高橋 奏翔・

33

奈良市立朱雀小学校

二年

石井 称乃果・

33

◇小学校高学年

指定読書 みんなでかなでている

宇陀市立大宇陀小学校

四年

岸本 雛花・

33

◇中学校

指定読書 戦いながら生きる

自由読書 青だけの世界

田原本町立北中学校

二年

木村 まいる・

34

奈良教育大学附属中学校

一年

藤島 円真・

34

◇高等学校

指定読書 煌めき

自由読書 希望の炎と不安の靄

奈良県立高田高等学校

一年

坂田 彩音・

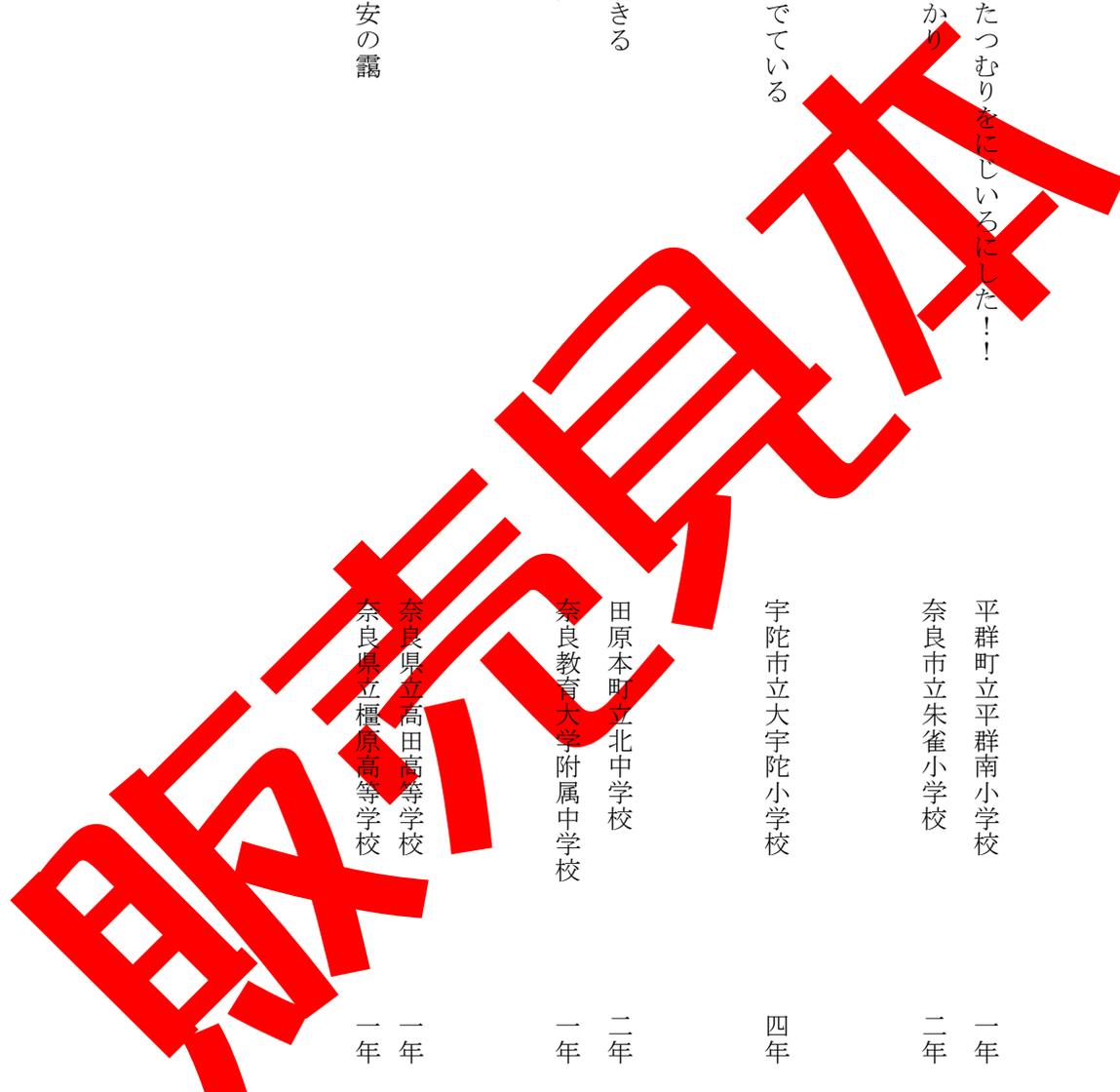
34

奈良県立橿原高等学校

一年

片岡 和・

34



奈良県教育委員会賞

◇小学校低学年

課題読書

『ごめんねでてこい』のかんそう

奈良市立鳥見小学校 二年 能登千遥

わたしはだいなみのいみがとてもきになったし、ひょう紙の女の子もかなしそうなひょうじようをしているので、この本が気になってすぐに読み始めました。

はなちゃんは思いがけず「おばあちゃんきらい。」と言ってしまいます。

さいごには、「きらいって言うてごめん。」と言って、おばあちゃんとおはぐをしたときにはなちゃんの目からなみだがあふれ出しました。そこを讀んだときにわたしの目からもなみだが出ました。そこまではとてもかなしかつたけど、そこからはほっとした気もちで読めました。

わたしもお母さんとケンカをしてひどいことを言うてしまった後「ごめんね。」あやまってはぐをするといつもなみだが出てきます。(こんなに大すきなお母さんなのに、なんてひどいことを言ってしまったんだろう。) と思ってつらくなるからなみだが出るのだと思います。はなちゃんのおばあちゃんはきゆうきゆう車ではこばれましたが、わたしのお母さんも今年の夏にはいえんにかかり、毎日てんてきをしてなんしゆうかんもしんどそうに

ねこんでいました。その時わたしもはなちゃんのようにこうかいしないようにお母さんをしんぱいし、やさしいことばをかけたたりお手伝いをしたりしました。おとうとおせわもしました。でもじっさいお母さんが元気になってからはまたケンカをしたりお手伝いをサボったりしているの、たまたまこの本を思い出して、これからもやさしくできるようにになりたいと思います。

ささきみお 作・絵 『ごめんね でてこい』(文研出版)

自由読書

やわらかいこころ

大和郡山立郡山北小学校 一年 宮井 日彩華

「どうぞ。」わたしは、このことばをいわれると、うれしいきもちになります。

うさぎさんがつくった「どうぞのいす」。ろばさんがどうぞのいすにどんぐりをおいて、ねているあいだに、いろんなどうぶつがきて、どうぞのいすにおかれています。たべものをたべて、じぶんのもっているたべものをおいていく。というおはなしです。

わたしが、このほんのなかですきなところは、ろばさんが「なんてしんせつないすだろう。」というところ、ほかのどうぶつが「あとのひとにおきのどく」というところです。どうしてすきかというと、

じぶんのことだけではなくてみんなのことをかんがえて、いったりうごいたりしているところが、やさしさでいっぱいだなとおもったからです。

ママが、『1さいくらのときから「どうぞ」「ありがとう」というやりとりをしていたんだよ。』とおしえてくれました。せきをゆずったり、じゅんばんをゆずったり、おともだちにものをかしてあげたりする。どうぞは、いわれたひとといったひともうれしくなります。だから、わたしはみんなにゆずってあげたり、かしてあげたりができるそんなひとになりたいです。

そして、おもちゃをつかうときやとしよかんてかりたほんをよんだりするときは、じぶんのあとにつかうひとのこともかんがえて、たいせつにつかいたいです。そうすると、つぎにつかうひともおもいすいし、ずっときれいだからきもちがいいとおもいます。

みんながかぞくやおともだちのことを、かんがえることができたら、このほんのおはなしみたいになやみさでいっぱいになるとおもいました。

香山美子 作 柿本 幸造 絵 『どうぞのいす』(ひさかたチャイルド)

◇小学校 中学年

課題読書

わたしにもできること

天理市立樺本小学校 三年 矢尾花香

わたしは、この本を手にとった時にどうしてプラスチックストローとさようならしなくてはいけないんだろうと思いました。紙ストローは使っているうちにふやけてきてのみ物をさい後までおいしくのむことができないのでがてです。プラスチックストローはかたくてのみやすいし、まがるストローは小がらなわたしにとってとてもべんりなのでさようならするのがいやでした。

この本を読んでむかしはあしやライ麦などのしよくぶつをストローとして使っていて、それをさらに使いやすいように作り直されべんりでじょうぶなプラスチックストローがせかい中に広がったけど、いろいろな問題が出てきたことを知りました。

いちど使うとすてられるペットボトル・レジぶくろ・ストローなどのプラスチックせい品は土の中でしぜんにくさったり、水にとけずいつまでもなくなりません。このプラスチックが海でくらす魚やカメ・海鳥などが口に入れてしまったり、のどにつかえてしまつていのちをおびやかしてしまいます。

わたしは、どうしたら海でくらす生き物を守ってあげられるのかなと考えた時に家族で川に魚つりに行った時のことを思い出しました。ふなやこの口にはりがついたままでプラスチックのつり糸がエラやヒレにからみついて泳げなくなつていたり、カメにもこうらや手足につり糸がぐるぐるまきになっていました。わたしたちは、ペンチとカッターでやさしくいねいに一本ずつつり糸をとり、ふなの口についていたはりもゆびでとつて川にかえしてあげました。人は魚つりを楽しんでい

るけど、魚にめいわくをかけていることに「ごめんね」の気持ちでむねがいっぱいになりました。そんな気持ちで川のまわりを見るとおにぎりをつつんでいるビニールやのみ物のプラスチックコップ、アイスクリームのスプーンなどたくさんすてられています。

わたしはこのゴミが川でくらす生き物を苦しめることになると思ひゴミをひろつて帰りました。川や海・山など地きゆうのすべては人間のものだけではありません。すべての生き物のためにあるのです。もつともつとかんきようを守ることを大切にしたいです。

わたしにできることはゴミをへらす、使いやすいプラスチックストローよりも紙ストローにする。少しはずかしいけれどなくてもよいものは「いらな

いんです」とことわるゆう気をもつことだと思ひました。

ディー・ロミート 文 ズユエ・チェン 絵 千葉茂樹 訳 『さようなら プラスチック・ストロー』 (光村教育図書)

自由読書

ためいきと笑顔

奈良市立登美ヶ丘小学校 三年 尾内ふみ

「はあー。」

さい近、わたしはよくためいきをついている。とくに、宿題をしながら、ねずみ色のためいきをついている。だから、わたしは「みんなのためいき図鑑」を読んでみることにした。

これは、小学四年生の五人でためいき図鑑をつくるお話だ。この本を読む前は、ためいきはつかないほうがいいと思つていた。なぜなら、母が「ためいきをつくと、しあわせがにげていく」と言っていたからだ。でも、この本を読んだ後は、ためいきは大事だと気づいた。ためいきをつけば心がスッキリするし、前向きになれる。そして、主人公のちんから学んだのは、

「ためいきは、さいごには笑顔をつれてくる」

という考えだ。この言葉がとてもすてきだと思つた。本を読んでから、家ぞくがためいきをついたら、

「あつたためいき！」

と言ひあつたり、

「今の何色のためいきかな。」
とわらいあつたりしている。ためいきをつくたび
楽しくなる。

心へのこった場面は小雪と加世堂さんが話し合
うところだ。二人ともためいき図鑑の絵をかきた
くて、もめていた。だから、小雪も
「わたしもかきたい。」
と強く言うかと思つたけれど、あつけなく
「いいよ。」
と言つたことにおどろいた。それはきつと加世堂
さんの本気が小雪につたわつたからだろう。

わたしにもこんなけいけんがある。ようち園で
げきのやく決めをした時、同じやくをやりたい人
が、わたしともう一人いた。その時は、先生が
「じゃんけんしなさい。」

と言つたので、じゃんけんで決めることになった。
そして、わたしがかった。かてたからわたしはうれ
しかったけれど、まけた人はがっかりしていた。

じゃんけんは、すぐに決まるしかんたんだ。でも、
まけたらくやししいし、自分の気持ちを伝えたり、相
手の気持ちをわかることができない。だから、これか
らもし何かを決める場面があつたら、話し合いで
決めたい。小雪と加世堂さんのように、本気をなら
べて、向き合つてみたい。そうすれば、おたがいの
気持ちをお互いにできると思う。

村上しいこ 作 中田いくみ 絵 『みんなのため
いき図鑑』(童心社)

◇小学校高学年

課題読書

わたしもきつとうそをつく

葛城市立忍海小学校 五年 飯田 愛梨

第二次世界大戦末期の昭和二十年八月九日。

宮城県女川町への大きな空襲で、日本海軍の「大
浜」「天尊」等の艦艇が撃沈された。そこにひいお
じいちゃんの『兄ちゃん』が海兵として配属され、
まさにこの日に戦死している。終戦のほんの少し
数日前のことだという。

今年、ひいおばあちゃんの家をリフォームし、一
緒に住もうと皆で物置きを片づけていた春先、ひ
いおじいちゃんのお母さん、ひいひいおばあちゃん
の古いタンスの奥から『戦没者追憶慰霊』と書か
れた案内文と記念品のようなものが、あちこち虫
喰いやしみに変わった日本の国旗にくるまれて出て
きた。案内文もずい分と黄色くなつていて、私が生
まれるよりずっと前の日付だった。

私はすぐに「戦没者って誰？お仏さんの部屋の
写真の人？」と聞いた。ばあばは「そうや。海兵の
服を着て、帽子をかぶつた白黒の写真の人。ひいお
じいちゃんのお兄さんやつた人。戦争で行つた先
で亡くなった人やで。」と言つた。「ひいおじいち
ゃんは死ぬまで戦争の時のことはよく覚えていて、
『兄ちゃん』の遺骨も遺品も戻ってきてない。『兄
ちゃん』がどこでどのように死んでいったかなん

ていうのは全く分かんつて言つていたわ。」と教
えてくれた。

戦後、女川に行つたひいひいおばあちゃんたち
は、そこでひざをついて海に向かつて泣いたそう
だ。

私は同じだと思つた。ひいひいおばあちゃんも
きつと「タツさん」と同じだと思つた。絶対に一日
も息子の事を忘れた日なんてなかったと思う。ひ
いおじいちゃんだつて死ぬまで忘れていなかった。
娘のばあばや孫のお母さんにも『兄ちゃん』の話
をしていたくらいだったのだから。

戦争は哀しい。体だけじゃなく心にも大きな傷
を残して、それはずっと消えない。たつた今起きた
事のように、深く深くきざみ込まれる。

「シヨウタか」「はい」：「シヨ、シヨウタです」

「かあちゃん、さがしてくれてありがとう」

私も絶対うそをつく。それで少しでも、ほんの少
しでも心が救われるなら……

「ミノルさんといっしょに行きんさい」

走つていくぼくとレイの影を「タツさん」はどん
な気持ちで見送つただろう。ひいひいおばあちゃん
とひいおじいちゃんはどんな気持ちで海をなが
めただろう。

今も「原爆の像」には平和を願うたくさんの千羽
鶴が捧げられている。私は犠牲になつた人や残さ
れた人の悲しみが少しでも救われることを心の底
から強く願つた。

西村すぐり 作 中島花野 絵 『ぼくはうそをつい
た』(ポプラ社)

自由読書

『みえるとかみえないとか』を読 んで

大和郡山市立筒井小学校 五年 好 田陽 大

ある日、道を歩いていると、「ピッポッ、ピッポッ」という音が聞こえてきました。お母さんにたずねると、それが目の見えない人たちが信号を渡るための音きよう信号だと教えてくれました。目を閉じて歩いてみましたが、何も見えず、すぐに怖くなってしまう音だけをたよりにすることがとても難しいと感じました。目が見えない人たちはどんな風に感じているのだろうかと考え、自然と「大変だな」と思うようになりました。

その後、図書館でカラフルな表紙にひかれヨシタケシンスケさんの『みえるとかみえないとか』という本を借りて帰りました。すぐに読み始め、宇宙飛行士の「ぼく」がさまざまな星を訪れて、そこに住む不思議な生き物たちと出会う物語にどんどん引き込まれていきました。たとえば、前にも後ろにも目がある生き物たちが登場します。彼らは後ろも見ることが普通なので、後ろが見えない「ぼく」「かわいそう」と感じて気をつかってくれます。しかし、「ぼく」はそれが自分の普通であり、不便だとは感じていないので、彼らの気づかいに少し変な気持ちになります。

この場面を読んで、音きよう信号のことを思い出しました。目が見えない人にとって、音を聞いて

信号を渡すことは普通であり、特別なことではないと気づいたのです。僕にとっては目で信号を確認することが普通ですが、人によって普通の方法が異なることを知りました。さらに、物語の中で「ぼく」は生まれつき目が見えない生き物に出会います。彼らは音やにおい、手ざわりで世界を感じ取り、僕たちが見落としてしまうような細かな変化にも気づきます。彼らにとってはそれが普通であり、不便だとは感じていません。「ふつう」とは人それぞれで、他人の普通を決めつけることはできないのだと学びました。

この本を読んで、「ふつう」ということが人によって異なることを理解し、それぞれのふつうを尊重することが大切だと感じました。目が見えない人が音きよう信号を頼りに信号を渡すことも、その人にとつての「ふつう」であり、僕とはちがうやり方で生活しているだけなのです。これからは、しようがいのある人や自分とはちがう背景を持つ人たちと接するとき、自分の「ふつう」を押し付けるのではなく、相手の「ふつう」を考え、理解することを心がけたいと思います。さまざまな人たちとの出会いを通じて、お互いのふつうを尊重し合える関係をきずいていきたいです。どんなひととでも、ヨシタケシンスケさんの本の中であつた「だよー」って一緒に言えるように。

ヨシタケシンスケ 作 伊藤亜紗 相談 『みえるとかみえないとか』(アリス館)

◇中学校

課題読書

「GO FOR YOUR DREAM」

生駒市立緑ヶ丘中学校 三年 山地 奏花

「あなたの将来の夢は何ですか?」というこの質問を、私は物心がついた頃からあらゆる場面で幾度となく受けてきた。小さい頃は人形の髪を結んで色々なヘアスタイルにするのが大好きだったので、「美容師さんになりたい」と私はその都度答えていた。しかし、小学校高学年になるにつれ、自分の得手不得手も何をなく分かってくるようになり、また世の中には様々な職業があることを知り、美容師以外の仕事にも興味が出てきた。

そして、中学三年生を迎えた今、高校受験という進路に向けて自分の将来について今までのように何となくではなく、少し真剣に考えるようになってきた。「私は将来どんな仕事に就きたいのか?どんな職業が向いているのか?」と自問自答を繰り返す日々が続いている。

私が課題図書『ノックドウライオウ』を読んでみようと思ったのは、シェーズデザイナーを夢見る中学生の主人公、夏希が日々続く家業の靴店での人との出会いや様々な出来事や経験を通して「自分の進路」を少しずつ決めていくストーリーと紹介されていたからだ。まさに今、自分の進路に

悩んでいる私に「ピッタリだと思った。もしかしたら、これからの自分の道路選択のヒントになるものが得られるかもしれないと本を手に期待している私が出た。

靴店での話がメインなので、正直、オーダーメイドシューズの作業工程は素人の私には少し難しく感じた。しかしながら、靴職人でもある夏希の祖父が持つ昔ながらの職人気質な部分にとっても惹かれた。どんな環境下でも自分の仕事にプライドを持ち、いかなるお客様に対しても丁寧な仕事をするという彼のプロ意識の高さに私は感銘を受けた。

夏希の祖父はお店では「マエストロ」と呼ばれている。それはイタリア語で師匠という意味を表す。そして、靴職人として一流のマエストロの仕事は幼い頃から間近で見えてきた夏希の鋭い観察力や仕事に対する熱い思いも強く感じた。同世代としてうらやましく思うと同時に私は少し焦りも感じてしまった。

お客様は主にリピーターが多いが、新規のお客様にも「たった一足の靴で自分の人生が変わった！」と言わせてしまうのには驚いた。歩き方だけではなく、履いている人の表情まで変えてしまうなんて、本当にすごい事だと思う。

そしてもう一人、私が魅力的に思える登場人物がいた。夏希と同じクラスメイトの宗太だ。彼はこの靴店と出会い、大好きだった兄の死を乗り越えようと、前向きに少しずつ歩んでいくこととする。その姿に胸が熱くなり、同世代として心から応援したくなった。靴づくりに興味を持ち始めた宗太が

夏希の祖父に「見学に来てもいいですか？」とお願いするその行動力にも勇気をもらった。と同時に、私も自分の進路について、少しずつ行動を起こしていかなければいけないと少し焦った。

また、最初はお互いにぎこちなかった夏希と宗太の関係も、靴店での見習いとして共に過ごした時間やお店でのトラブル対応に加え、それぞれが抱えている家族の事情を互いに告白することで、二人の心の距離が縮まったように思う。そして、この夏希と宗太の関係性がとても素敵だと感じた。二人とも憎まれ口を叩き合いながらも時には互いを気遣い、同じ見習いをする者同士良きライバルであり、仲間でもあるという切磋琢磨する二人の関係が私は羨ましく思えた。学校や部活動で私もこの二人の関係性と同じような仲間がいる。この本を読んで、改めて仲間の大切さを強く感じた。同じ志を持つ仲間の存在は本当に大きく、いつも私の背中を押してくれる。

最後に、この本の登場人物に一人も悪い人は出てこない。何故なのか？それは、夏希の祖父の靴づくりの高い技術に加え、毎回変わらない思いやりのある接客がお客様の心も優しく解きほぐしているのだと考える。

読み終えた後、私自身とても前向きな気持ちになつていった。夏希のように具体的な将来の夢を今はまだ持っていないが、私もこれから自分自身としっかり向き合っていきたいと素直に思えた。中学三年の夏休みももうすぐ終わる。夏希や宗太と

同じように私も仲間と共に自分の進路に向けて着実に一歩ずつ踏み出していきたい。

佐藤まどか 著『ノックドウライオウ…靴ノ往来堂』
(あすなる書房)

自由読書

私はこう生きたい

奈良女子大学附属中等教育学校 三年 北村 優季

私はもうすぐ十五歳で、すぐそこに大人が近づいている。社会科で経済活動の中核を担う生産年齢人口は十五歳からで、その歳には働く人もいることを学び衝撃を受けた。社会に役立つ立派な大人にならなければならないのだろうか、不安と焦りで押し潰されそうになった。そんな時に「君たちはどう生きるか」という題名に惹かれ、この本を手にとった。純粹で心優しい十四歳のコペル君が日常の出来事を通して感じたたり考えたりしたこと、それに対する叔父さんの難しくも納得できる考え方や生き方を記したノートから成る物語である。この本を読んで、立派な大人とは何かとそのために必要なことやすべきことについて深く考えさせられた。私はコペル君と叔父さんとのやり取りに心を打たれ、これからの未来に力強く前向きに進んでいくと決意した。

立派な大人になるために必要な考え方として、「天動説とコペルニクスの地動説」の視点がある。

ある日コペル君は、人間は広い世の中の一分子のようだとすることに気づく。

それに対して叔父さんは、コペルニクスが地球を中心に宇宙を見たのではなく宇宙から地球を見たことになぞらえ、視点を増やし全体を見ることが大切だと説いた。確かに納得がいく。私は中学生になり、クラスにバレーボール部、学園祭の実行部と所属するコミュニティが増えた。同級生だけでなく先輩や後輩と関わることができ楽しい反面、悩みも様々に増えた。特に部活動では、キョウブテンとしてチームをまとめることに悩んだ三年間だった。叔父さんの「自分ばかりを中心にして、物事を判断してゆくと、世の中の本当のことも、ついに知ることが出来ないでしまう。」という言葉の通り、自分の気持ちを優先しては解決できない事ばかりだった。視点や立場を変えて考えてみると新たな発見があったり、これまでの答えとは違ったりする。多くの人と接して視野を広げることや、見方を変えたり相手の立場に立ったり多角的な視点で考えることが必要である。

そして、その考え方を基本として人や物事を「生産者と消費者」の視点から捉え直すことが必要である。コペル君の友達の前川君は、豆腐屋の息子であるが貧しい暮らしのためにいじめられていた。しかし、ある日家を訪ねると一人前に豆腐を揚げて売っていた。叔父さんは前川君とコペル君との違いを生産者か消費者かの立場にあると指摘した。見方を変えれば捉え方も変わるのだから。加えて、学問の世界でも芸術の世界でも、生み出す人はそ

れを受け取る人々よりはるかに肝心な人であると説く。考えてもみななかったことに衝撃を受けた。人の価値は服や家、財産にあるのではなく、人の役に立つものを生み出し社会に貢献すること、すなわち生産者になることが立派な大人には必要だと気づいた。

これまで社会に貢献することは自分にとって何の得があるのかと思っていた。コペル君は粉ミルクが多くの人たち（例えば、牛の世話をする人や乳を工場に運ぶ人、粉ミルクにする人、缶に詰める人、粉ミルクを運ぶ人、売る人など）によって自分の元に届くことに気づくが、それは粉ミルクだけでなく他も同様である。つまり、私たちらは会ったこともないような大勢の人たちと網のように繋がっていて、歯車のように互いに関係し合いながら社会を動かしているのだ。いつか自分を支えてくれる誰かを支えたり、消費することでお金が生産者に還元されたり、貢献は巡り巡って結局自分に返ってくるのである。様々な貢献によって支え合いながら社会は成り立っている。ただ、自分を犠牲にして貢献する人は立派な大人ではない。辛かったり余裕がなかったりすると人間らしく生きることができないからだ。それに、ゆとりがあつてこそ貢献は大きくなる。つまり、社会への貢献と自分の幸せ、この二つが両立できている人が立派な大人なのではないかと考えた。

中学生の私はコペル君と同様に何かを生産しているわけではない。衣食住の物質的なものだけではなく、日々の勉強も先人の考えを教わり、ただ

け取っているだけである。「君は消費ばかりで物質的に何も生産していないが、他の点である大きなものを日々生み出している。それは何か。」という叔父さんからの問いがある。私の答えは、「自分の未来への可能性」である。社会に出るまでの生き方によって無限の可能性を生み出すと考える。今後の学生生活をどのように過ごすのが私の課題であるが、まずは医学研究者という夢が本当にやりたいことなのか、向いている仕事なのかをじっくりと見つめ直したい。そして、人の役に立てるようになり一杯勉強して力をつけたい。また、様々な人との関わりの中で視野を広げるために、留学やボランティアなどにも挑戦して成長したい。多くの人たちの繋がりによって支えられている事に感謝して、私の能力を発揮し社会の中で貢献できるように、立派な大人になれるように努めたい。

吉野源三郎 著『君たちはどう生きるか』（マガジンハウス）

◇高等学校

課題読書

ただ、やる

奈良県立橿原高等学校 一年 瀧 本 琉 偉

この夏休み、私は『優等生サバイバル―青春を生き抜く13の法則―』という本を読みました。この本は、学校で「優等生」として知られる学生が、どのようにして数々のプレッシャーや困難を乗り越えていくか、そのためのヒントを13の法則としてまとめています。私自身も学校で成績が良いとされ、周囲からの期待に応えようとする中で、同じような悩みを抱えていたため、この本に書かれていることにとっても共感しました。特に私の心に響いたのは、「ただ、やるってことだよ。目の前にあることをあれこれ理由など付けず、まずはやってみるんだ。」という言葉です。この言葉を見た時、私はまるで自分自身がこれまでの生活で抱えてきた不安や迷いが一気に解き放たれるような感覚を覚えました。なぜなら、私も新しいことに挑戦するときや困難な課題に直面した時に、考えすぎてしまい、行動に移すまでに時間がかかることが多かったからです。例えば、試験勉強を始める前に、最も効率的な勉強法を探そうとインターネットで調べたり、友達に聞いたりするのですが、その結果勉強を始めるのが遅れてしまうことがありました。また、部活動でも、新しい練習方法を取り入れる際

に「本当にこれが効果的なのか」と疑問を抱き、結局いつもの方法に固執してしまうことがありました。こうした慎重さが時には役立つこともありますが、考えすぎて行動を起こせなくなることで、結局は自分の可能性を狭めてしまうということもあるのだと感じました。

しかし、この本の中で「ただ、やる」という言葉に触れた時、私は考え方を改める必要があると強く感じました。著者が言うように成功や成長の鍵は完璧な準備や計画ではなく「まず一步を踏み出す勇氣」にあるのです。例えば結果が思うようにいかなくても、その経験は次に生かすことができるし、何もしないままではいられない価値があると、この言葉は教えてくれました。私はこの言葉を自分の生活に取り入れることを決意しました。例えば宿題をする際に、あれこれ理由をつける前にまず手を動かしてみようと思いました。そうすると以前よりもスムーズに課題が進み時間を無駄にすることが少なくなつたと感じています。以前は「どうやって始めるべきか」と考えすぎることが多く、実際に作業を始めるまでに時間がかかることがありましたが、この本を読んだからは、まず行動してみることで自然とやるべきことが見えてくることに気づきました。また「ただ、やる」という言葉は私に新しい挑戦に対する勇氣を与えてくれました。これまで私は新しいことに挑戦する際に「失敗したらどうしよう」と恐れ、なかなか一步を踏み出せないことが多かったのですが、この本を読んでからは「まずはやってみる」という姿勢を身につける

ようになりました。例えば学校でのスピーチやプレゼンの準備でも、以前は完璧な準備をしてからでないと始められないと思っていました。今ではまず話し始めることを優先するようになりました。その結果、自然と自信がついてきて以前よりも積極的に物事に取り組めるようになったと感じています。さらに、この言葉は人間関係にも良い影響を与えました。これまで私は、友達やクラスメイトとの関係においても、何かを言う前に「これを言ったらどう思われるだろう」と考えすぎることが多く、自分の気持ちを素直に伝えることができないことがありました。しかし「ただ、やる」という考え方を取り入れてからは、もっと率直に自分の意見を伝えることができるようになり、結果として友達との関係も以前よりも良好になりました。

この本から学んだ「まずはやってみる」という姿勢は、これからの人生においても非常に役立つものだと感じています。青春時代は多くの挑戦と成長の機会が詰まっている時期です。この時期に得た経験は一生の財産になると信じています。「ただ、やる」というシンプルで力強いメッセージは、私の中に深く刻まれており、今後迷った時や不安に感じた時に、この言葉を思い出し行動していきたいと思えます。この夏休み、『優等生サバイバル―青春を生き抜く13の法則―』に出会えたことは、私にとって大きな意味をもつ出来事でした。これからも、まずは一步を踏み出す勇氣を忘れずに、自分の目の前にある課題や挑戦に向き合っていこうと思います。例え失敗しても、それを糧に成長し、

より良い自分を目指していくことができると思っています。この本から学んだことを胸に、充実した青春を過ごしていきたいです。

ファン・ヨンミ 作 キム・イネ 訳『優等生サバイバル―青春を生き抜く13の法則―』（評論社）

自由読書

『汝、星のごとく』を読んで

奈良県立桜井高等学校 二年 乾 結衣

「好きなことをして生きたい。」誰もが願う言葉だろう。しかし、現実はそのを許してくれない。私の家族は仲が良くない。家族全員で出かけた記憶も、一緒に食事をとった記憶も、父と会話をした記憶もない。それが普通だと思っていた。そのことに違和感を感じたのは小学六年生のときだった。友達と話することは、家族一緒に旅行に行ったり、遊んだりしたという内容だった。この話を聞いた時私の世界は崩れた。あまりにも衝撃的で、仲が良いということ、羨み、憎いという気持ちが生まれた。それから他の家庭とは違う衝撃と羨望を背負いながら学校生活を過ごしてきた。友達の話や聞いたことに胸が張り裂けそうになる。そんな時この本と出会った。美しい表紙に心を奪われ、読んでみることにした。

私は主人公である暁海に共感する部分があった。暁海は浮気をした父のせいで心を病んでいく母の

介護に忙しく、本来行きたかった東京の大学に進学することが出来なかった。古い価値観をもった会社で働き、母のためにお金を稼ぐ。自分の人生を生かせることが出来なかった。私は暁海と自分の姿を重ねて読んだ。暁海のように、本来自分が背負うべきではない荷物を持っている子がいるということに安堵した。自分だけではないんだと。世界には仲の良い家族がたくさんいて、こんな思いや考えをしたことがない人もいるだろう。生まれた時点で持っている荷物の量はそれぞれ違うのだ。私が小学六年生になる前まで持っていた常識は少数派の考えなのだろうか。多数派であってほしい。そう思うということも少しでもこの気持ちを誰かと共有し、自分のかたちをなんとかとめようとしているのだろうか。暁海は親という荷物を背負っている。本来ならば背負う必要のない荷物だ。きっと他の人からはそんな親と縁を切ったほうが良いと言われるだろう。けれど切るには覚悟が必要だし、切ったら切ったで罪悪感が残り、周りからは腫れ物のように扱われる。行き場のない思いに心を潰されそうになりながらも前を見続け、何度も挫折を味わいながらもそのたびに立ち上がり、誰に何を言われようとも好きなことをする覚悟を決めた暁海の姿に感動した。

その覚悟を決める手助けしてくれた瞳子さんという人物に私は衝撃を受けた。瞳子さんは暁海の父の浮気相手だ。周りから何を言われても瞳子さんは暁海の父を家に帰そうとしない。

「いざつてときは誰に罵られようが切り捨てる、もしくは誰に恨まれようが手に入れる。そういう覚悟がないと、人生はどんどん複雑になっていくわよ。」

瞳子さんの言っていることは正論だが、納得いかない人もいるだろう。正しさだけで物事を決めることは出来ない。それをするにはとてつもなく大きな勇気がいるし、何より周りの目が怖い。瞳子さんも最初はそうだったはずだ。最初から強い人間なんていなくて、一つ一つ自分で言葉を拾い集めて獲得した。だから暁海の気持ちの方が分かり、手助けをしてくれたのだろう。世間の常識とは外れているけれど、人としての正しさは持ち合わせている。正しさは、人を傷つける武器にもなるけれど、自分を守る盾にもなる。悩み続ける私達の最後の手段として正しさは必要なのだ。私は最近まで、大人はみんな完璧だと思っていた。正しくて、なんでも知ってて、かっこいい。けれどこの本を読んで、そうではないんだと気付いた。大人でも間違っているところはあるし、落ち込むこともある。完璧じゃなくてもいいのだ。そう気付かせてくれた瞳子さんはこれからの私にとって、心の支えとなる大きな存在になるだろう。

仲の良い家族が羨ましいという気持ちも、傷ついた心も、消えることはないだろう。どれだけ苦しい思いをしても過去に戻ることも、生まれ変わることもできない。けれど、この経験や考えを未来の私が無駄ではなかったと思えるように私は今を精一杯生きる。自分の足を引っ張るおもりではなく、

自分を奮い立たせる原動力となるように。正しさだけですべてを決めることはできないし、自分の人生を好きに生きるとは難しい。けれど、最後に選択するのは自分だ。周りの人に何を言われなくてもこれが私の幸せだと決めたのなら、誰のためでもない、自分のための選択をしてもいいんだと思えた。きつとこの先、私の人生にはさらなる壁が私を足止めするだろう。そんな時には、もう一度この本を読もうと思った。

風良ゆう 著『汝、星のごとく』（講談社）

毎日新聞社賞

◇小学校低学年

課題読書

ぼくがおもう「おおもの」

近畿大学附属小学校 一年 毛利 太賀

ぼくは、クラスでいちばんせが小さいです。だけど、それはずかしいとおもったことはありません。クラスではせのじゅんがいちばんまえでたいちようとおぼれているので、みんなのおてほんになるようかっこよくならびます。ほんがすきで、たくさんのことをもつとりたいきもちがあります。ともだちとあそぶことがすきで、あそびのアイデアをだして、人をたのしませることもすきです。

いじめっこは、マルくんのおんとうをきもちわるいといって、ちびといました。そして、テンちゃんは「いじわるだよ。」といました。するといじめっこは、「なんだよ。ちーび。」といました。テンちゃんが大ごえで「あたしはちびじゃない！」といました。ぼくはこのばめんがいちばんおどろきました。テンちゃんが大ごえをだしたとき、きもちは、マルくんのためにがんばろうというきもちだったんだとおもいます。マルくんのためにゆうきをだしていったことがすごととおもいます。きつとじぶんはせが小さいけれど、ものしりがんばりやさんだというきもちがみかたになつて、人のためにゆうきがでたのだとおもいます。

いちばんぼくのころがあたたかくなつたばめんは、マルくんがテンちゃんのことを「おおもの」だといって、ふたりでニコツとしたところ。せが小さくても、テンちゃんのこころにはだれかをたすけようというゆうきがあります。ともだちがこまらないかなと、しんばいするやさしさもあります。

ぼくがおもう「おおもの」とは、ゆうきをだしてまわりのためにこうどうできる人です。ぼくのおとうさんは、しごとで人のそうだんにのつていきます。そのすがたがともかっこよくて、「おおもの」だとおもいます。ぼくもそうになれるようによなかのことをしろうとするきもちや、人にやさしくするこころを大せつにしたいとおもいます。

マヤ・マイヤーズ 作 ヘウオン・ユン 絵 まえざわ あきえ 訳 『おちびさんじゃないよ』（イマジネーション・プラス）

自由読書

かがやけいのち！みらいちゃん

桜井市立桜井西小学校二年 和井内 千尋

この本は、大けがをしてすてられていたみらいちゃんがあたらしいかいぬしさんと出会うまでにけいけんしたことが書かれています。わたしは、この本を読んで、はじめて犬がころされる場所があることを知りました。

「あきた」や「せわができない」という理ゆうで犬をすてたりする人がいることもはじめて知ってとてもかなしくびつくりしました。

犬たちがぶるぶるとふるえながらしぬじゅんぼんをまつているところは、たいようの光もとどかないくらいで、つめたいところでした。みらいちゃんもどんだんさい後のへやに近づいていつて、こわくてたまらなかつたと思います。

しらべてみると、1年間で2000頭いじょうの犬がころされていて、一日だとへいきん六頭の犬がしんでいつていることがわかりました。わたしには犬がじゅんぼんをまつてまでころされないといけない理ゆうが分かりません。人がかつてにすてたのに、元気な犬がころされてしまうのはとてもかなしいです。

みらいちゃんは、そのちよく前で、やさしいまりこさんにたすけられ、あたらしいかいぬしさんもさがしてもらえました。けがをしていたふじゆうな足でもおもいきり走って一生けんめい生きました。もしなん日かまりこさんに見つけてもらおうのがおそかつたら、みらいちゃんはいくらいへやでひとりぼっちでしんでしまっていたかもしれませんとりぼちでも、やさしいまりこさんのようにみらいちゃんのような犬たちをたすけてあげてかいぬしさんをさがしてあげられる人になりたいです。

今西乃子 文 ひろみちいと 絵 『かがやけいのち！みらいちゃん』（岩崎書店）

◇小学校中学年

課題読書

音とひびきのふしぎ

大和高田市立陵西小学校 三年 中 垣 昂 大

「ゴオー」という工事の音、「カンカン」というたつ球のピンポン球がはねる音、「ピラッ」という絵本をめくる音。いろんな音が、ぼくのまわりにある。

ぼくがこの夏に読んだ本は、『聞いて聞いて！音と耳のはなし』という本だ。この本には、人の声の声たいというところでもふるえて出しているということ、耳が空気のふるえをキャッチして、のうにしんごうとして、音になつていくということが書かれていた。そのほかにもふるえのことや、動物の声、空気がいに音のなみをつたえるものに鉄や水があることなどがわかつた。ぼくは今まで音は耳で聞いていることだけ感じていたけれど、音がふるえて耳の中にとどいていくということは、はじめて知つた。

この本を読んで二つのことが気になつた。音の高いひくいのがいと、音のひびきのことだ。ぼくは、家でピアノをひいている。この夏発表会があつた。家でたくさんれんじゆをした。ピアノはひくい音が左にあつて、高い音は右にある。ひくい音が出る方のげんは太くて長い。高い音はほそくてみじかい。今までなぜ太さや長さがちがいがあ

のかわからなかつたけれど、この本を読んで、大きなものが出す音がひくく、小さなものが出す音が高いことがわかつた。

そして、発表会当日、ホールでピアノをかけた。家でひいていたときとくらべると、音が大きく、強さがましたような感じがした。ほかの人のえんそを聞くと、とてもやわらかく聞こえてきた。音の感じが、れんじゆうのときと何かちがうなあと思つた。

音のひびきがちがつていて、ぼくには音楽室にいるような、それよりもつとひびきがよくて、聞いていて気持ちよかつた。この本を読んで、ホールには音をはねかえして、ひびかせるしくみがあることがわかつた。

音はぼくのまわりにたくさんある。でも音がなるときをそうぞうしてみた。テストのときは音がなないように感じていた。けれど、よく考えてみると、えんぴつで書く音、けしゴムで消す音、紙をめくる音などたくさんある。あるはずの音がぼくには聞こえてなかつた。なぜだろう。きつとのが、自分のテストに集中するようにしてくれたのかな。耳とのがぼくを目の前のことに集中させてくれたみたいだ。のうと耳が全ぶの音をぼくにとどけていたから。エアコンの音、外のセミの声、友だちのえんぴつの音など、全ぶぼくにとどいていたら、いろんなことに集中できなかつたかもしれない。でもどうしても集中できないこともある。それはぼくがしゆくだいをしているとき、弟がテレビを見ているときだ。テレビを見たくてその音が耳と

のうにとどいてしまう。それってふしぎだなあ。音と耳、そしてこのうのしくみのふしぎをしることができて、うれしかった。

高津修・遠藤義人文 長崎訓子 絵 『聞いて聞いて！音と耳のはなし』（福音館書店）

自由読書

『しゅくだいクロール』を読んで

智辯学園奈良カレッジ小学部 三年 松 井 心 花

この本は、主人公のしよたという男の子が、引っ越しをする事になり、生まれ育った町で、さい後の夏の思い出を作るために、学校の水泳大会でレーのせん手としてしようせんするお話です。でも、しよたは一年生の夏に遊園地のプールでおぼれたことがあり、水がこわくて泳ぎことができません。泳ぐのがとくいな親友のかおるに毎日教えてもらい、クロールで二十五メートルを泳げるようになります。しかし、本番でとびこむ時、水をたくさん飲んで息苦しくなってしまう、なんとかラッコ泳ぎでゴールするも、クラスはビリといふけっかになったけれど、さい後まで泳ぎきったしよたを、みんなは自分のことのようによろこんでむかえてくれました。

まず、しよたが、短い期間でたくさんのお勉強、苦しみ、ど力しクロールが出来るようになった事がすごいと思いました。わたしは、今年の四月

に水泳を習いはじめました。さいしよは、しよたと同じように、水に顔をつけるのも苦手でした。しかし、ビート板やヘルパーを使ってバタ足の練習や息つぎの練習を重ね、じゅん調に級が上がるにつれて泳ぐ事がとても楽しくなりました。ところが、ヘルパーなしのクロールで苦せんしています。しよたと同じように、水をかきながら息つぎをするリこのリズムをつかむことがとてもむずかしくて、息つぎのたびに口と鼻に水が入り、体もしずむため、すぐに足をついてしまうようになりました。そのため、上手く泳げない事へのふ安が大きくなり、水泳をやめたいと思うようになっていたからです。

本の中でしよたは、水泳大会当日に、とびこみをしつばいしてしまい、泳げるようになっていたクロールが出来なくなります。それでもなんとかラッコ泳ぎでゴールしました。しよたはさい後まであきらめず、クラスのみんなや先生、かおるのために泳ぎつづけるすがたにわたしは心を動かされました。息つぎが上手くできずに水泳をやめたいと思っていた自分が、とてもはずかしくなりました。しよたのように、どんな泳ぎであっても、あきらめなければ前に進めるということを知りました。わたしも、と中であきらめるのではなく、このころのかべをのりこえたいと思います。

わたしはこの本を読んで、しよたからたくさんのおゆう気と元気をもらいました。また、さい後まであきらめずにがんばること、おうえんしてくれ

るみんなのためにがんばることの大切さも教えてもらえたと思います。

これからは、たくさん練習を重ね、ど力し、コーチやいつでもどんなときでもおうえんしてくれる両親にかっこいいすがたを見せていきます。

しよた、ありがとう。

福田岩緒 作・絵 『しゅくだいクロール』（PH P 研究所）

◇小学校高学年

課題読書

「誰かのために」

奈良市立鳥見小学校 六年 村戸 蒼 唯

一つの爆弾で十四万人の命。広島街に残された傷跡からその恐ろしさが分かる。また、人の心の中にも残る傷がある。この本のうその意味とは何なのか。

主人公のリョウタは広島市郊外に住む小学生。リョウタの一つ年上のレイの曾祖母タヅさんは原爆で息子のショウタを失った。しかし、今でもどこかで生きていると信じて、リョウタほどの年齢の子を見ると息子だと思い「ショウタ」と声をかけ探している。

そんなある日、大切な人の命を無惨に断たれたタヅさんの苦しみを和らげたくて、リョウタはタヅさんに「ショウタ」のふりをしてうそをついた。本の題名にもなっているこの場面に私はひきつけられた。うそではあったがタヅさんに笑顔が戻ったのだ。ずっと待ち続け、探し続けてきた息子との再会にどれほど嬉しく安心したことだろう。帰らぬ人と知らされても信じなかった。息子への強い思いを感じた。リョウタはうそをつくとき声が震えていた。きつと、うそをつくことに戸惑いや罪悪感があったのだ。でも自分がそうしなければ、タヅさんの不安や心の傷はいつまでも癒えることはな

い。タヅさんを思う気持ちがリョウタの中で溢れたのである。結果、勇気を出したことで、タヅさんの心の支えとなり苦しみから救うことができた。私にはきつとできなかったらう。それは、うそが誰かの役に立つという発想もなければ勇気もなく、とっさの行動力もないからだ。でも「誰かのために」と考えると一歩踏み出せるのかもしれない。「誰かのために」を心に置いておくことは大きな意味を持つことになる。

この本を通して、今まで感じたことのない辛い気持ちも味わい、やるせない思いが心に残った場面もあった。私にとつての戦争は歴史上の出来事としての認識だった。ニュースで他国の戦争を報道していても実感がなく「嫌だな」と思うだけで、他人事だった。そんな私も修学旅行で広島原爆ドームへ行く。戦争を直接肌で感じる機会になる。戦争は恐ろしいことだけと正面から向き合うことは大事だ。でも、それだけでは不十分だ。大切な戦争の切なさを知ってどう行動に移せるかだ。人間の改めるべき行動は沢山ある。私達人間は自分の「利益」と「安全」を最重視する。確かに自分を守ることは大切だ。利益を考えることは大切だ。それが全てではない。

誰もが自分中心の社会では救えるものも救えない。過去の教訓や今でも戦争で苦しむ人々を原動力に解決策を見出すことが現代の課題だ。「誰かのために」動き出すのだ。「平和に生きる」全世界の人々の願いを少しでも早く叶えることができるように。

戦争に区切りをつけるかつけられないのかは、人々の気持ちと行動にかかっている。そして、それを成し遂げた時、希望と愛情に満ちた世界が私達を、地球を包み込んでくれる。

西村すぐり 作 中島花野 絵 『ほくほうそをついた』(ポプラ社)

自由読書

『私はなりたい』

奈良市立鳥見小学校 六年 木口 依吹

私はよくトラブルが起きてしまった時に、「こうならなかったらよかったのか、どこから間違っていたのだろうか。」と考える、やり直せない悔しさを何度も感じたことがある。

物語の中でも、動物たちが思い描いていた未来とはあまりにも違いすぎる現状に、「こんなはずじゃなかった。なぜこうなってしまったのだろうか。」と、丘の上で、思い出の歌を口ずさみながら、静かに涙を流す場面があった。『もう後戻りできない』という大きすぎる絶望を同じように感じてしまい、とてもとても心が痛くなった。

この物語は、人間を動物たちに例え、ロシア革命とソ連国家の成り行きをモチーフとしたものである。

動物たちが国を作り始めた時は、上下関係がなく平等であったのに、動物たちの中から指導者が現れると優劣がつき出し、徐々に不平等になっていった。

「力を持つことで支配しだしたのか……。」
結果、指導者たちは行動に加え、仕草や顔つきまで人間たちと区別がつかないぐらい似てきてしまったのだ。指導者たちが後ろ足で立ち、鞭を持って、動物たちに自分の力を見せつけるように歩いてみせた場面が、鮮明に頭に浮かび、怖く、ひどく私の心に残った。

予想もしなかった展開に『発展』の恐ろしさを心の底から感じた。なぜならば、発展とは良きものばかりだと信じていたからだ。読み始めは、動物たちがみな平等に働きながら食事をし、生活をして、賢く強い者が弱い者を守る社会を作っていく希望の物語だと私は思い描いていたが、誰も思ったことは口に出せず、逆らう者は殺される社会になってしまった。現実はこのような政治が行われている国があることを知り、自分が生きてきた世界では考えられないため、衝撃を受けたと同時に大きな学びを得た。そして複雑な気持ちになり、言葉にならなかった。

本来、「強さ」「賢さ」を持つ者は、良き方向に導くべきなのに、自分たちにとって、都合の良いルールを好き勝手に作り、不利益なものは排除し、弱い者が苦しむ世界があつていいはずがない。二と私は強く思う。また、文明とは素晴らしく便利な反面、

私たちも使い方を間違えると悪い方向に進んでしまうということも、覚えておかなければならない。もう一つこの物語で深く考えたことがある。それは、みんなが平等で平和に過ごすことができるかは、リーダーの考えや行動によって大きく変わってくるということだ。

そのことを念頭に置き、自分の意見よりも、みんなの意見を先に聞き、みんなが納得出来るような案を考えたり、はつきりと意見を言葉に出来ない人がいる時には、少しずつ聞き出して、代わりにみんなに伝えていける人に『私はなりたい。』

ジヨージ・オーウェル 著 山形浩生 訳 『動物農場』(早川書房)

◇中学校

課題読書

夢

葛城市立新庄中学校 三年 中山 楓 那

「人生を変える魔法の靴店」これは、私が読んだ、『ノックドウライオウ』という本で出てきた言葉です。この本は、家業である、オーダーメイドの靴を作る、昔から代々続く靴屋さんの四代目孫として生まれた夏希が、高校受験が近づいてきて、将来の自分について深く考える、素直な中学生でありのままの姿が描かれています。おじいちゃんでもあり、師匠、別名マエストロと夏希自身の関係や、年の離れた兄が急に失踪したこと、苦手だったクラスメイトの過去が知れたことなど日常生活に変化があつたとき、夏希はどう行動するのか、どのように考えるのか、そして、自分だったらどうしていたかなどをよく考えさせられる話だと思います。

この本を読んで私は直感的に、まるで自分の人生を語られたようだと感じました。それは、私の家が、物語の主人公、夏希と同じ靴屋さんだからという訳ではありません。私が、家業の跡継ぎをするからでもありません。なのになぜか私は、自分の話のように感じました。何度か読んでいくうちに私は、主人公である夏希の心情がとても細かく言葉に表わされていたり、夏希自身の発言や行動の裏に表現されていたりということが、自分の人生だ

という錯覚を生み出しているのだと気付きました。「らせん階段をトントンおりて、わたしは今日も工房に入った。」という文がありました。私の印象に残った文の一つです。私はこれには、夏希が、マエストロのいる、小さい頃から通っていた親しみのある工房がだいすきだという意味だと捉えましたが、トントンという擬音語から、うきうき楽しいことが始まるという様子で階段を降りていることが分かります。わたしは今日も工房に入ったと表現することで、よく行っているということが分かります。このように夏希の行動一つ一つに意味を込めて文章になっています。そう表現することによって、マエストロの生き方や考え方、失踪した兄の気持ち、などずっと一緒に暮らしてきた夏希目線になって考えることができました。

私は、家業のあるなしに関わらず、夏希や私からの年代の子どもは今、将来について考えていると思えました。私の将来の夢は、ヘアメイクアーティストになって化粧品をプロデュースすることです。私は、この夢を胸をはって宣言することができません。なぜなら美容が大好きで、昔から興味があったからです。これは客観的にみると理由になっているのかわかりません。けれど私は「好き」という気持ちを大切にすることが最も重要だと思います。この物語の主人公、夏希も、幼い頃から身近にあった、靴という存在は大きく、「好き」でした。次の五代目マエストロになる予定だった兄がいなくなったことで、「まだ今の段階ではできないけれど、将来は自分が五代目になるはず。もつと今っぽく

ておしゃれなデザインを作った方が売れるのに。私が五代目を継がなかったらこの靴屋は無くなってしまうのかな。」そう思っていました。けれどひよんなことから、苦手だったクラスメイト、宗太がオーダーメイドの靴作りに興味を持ち、自分よりも優秀なライバルが現れたことで、やりたくないと思っていたはずだったオーダーメイドの靴作りも、「好き」なんだということに気づき、宗太と切磋琢磨していきこうという考え方になります。このような主人公の心情の変化からも、「好き」という気持ちは重要なものなんだと考えました。

そして、夏希の「好き」という気持ちと同じくらいに、マエストロであるおじいちゃん、自分の仕事に誇りを持つ、人に喜ばれる仕事をする、といった考えが生きていくうえで重要であり、人としての豊かさが表されているのだと思いました。私は、ものづくりに携わる職人の技が廃れ、作りが乱雑でも、安ければよいと安価な靴を使い捨てしている人が多いと言われる、今の日本に対しての作者の訴えであると感じました。靴以外の洋服や雑貨などでも、その時の流行りにのまれていけばそれで良いという考え方は私も分ります。けれど、これを一度使ってみて、長く使えるような品質の良いものがあるというのにも視野に入れてみると良いと思えました。

この作品のように私も、夢に対して、ぶれない価値観や生き様も魅力にできるよう、そして、この作品は、地道に信念を貫いて、やりたいことを続けて

いけば、自ずと報われていく、というメッセージだと捉え、自分をしっかり持って生きていこうと思えました。

佐藤まどか 著『ノックツドウライオウ…靴ノ往来堂』
(あすなる書房)

自由読書

成瀬の生き方から学んだこと

奈良県立青翔中学校 二年 山 田 和 奏

この本を読み終わったとき、私は「今まで本気で何かに取り組んだことがあっただろうか。」と思った。勉強、習い事、部活動、ずっと続けてきたトラペットでさえも「天下」を取ろうと思ったことは一度もない。それは面倒くさがりな性格からかもしれないが、それ以上に「失敗したら恥ずかしい」と他人の目を気にしていたからだと考えられる。そんな私に「成瀬」は大切なことを教えてくれたと思う。

主人公の成瀬は自分の意思を貫こうとする姿勢と、人一倍のチャレンジ精神を持っている。誰にも媚びずやりたいことを臆せず口に出す。最初の章である「ありがとう西武大津店」では、コロナ禍でもできる挑戦がしたいと言い「私はこの夏を西武に捧げようと思う。」と宣言する。閉店が控えている西武大津店に毎日通ってテレビの中継に毎日映るといふ挑戦だ。そんな成瀬を「変わり者」とい

って馬鹿にする人も現れるが、他人が自分をどう思っているかと全く気にせずに、自分のペースで、全力で「やりたいこと」に取り組む。成瀬は地域の人と協力したり、親友の島崎との友情の大切さに気づいたりしながら挑戦を続けるのである。

この物語を読んで最も心に残ったのは、成瀬の他人の目を気にしないところだ。失敗することが怖い理由は、失敗したら笑われる、結果を出せなかったら迷惑がかかるなどと、他のことはばかりを考えてしまうのが大きな要因だと思う。そんなことを考えていると、宣言をするなんて到底できなくなってしまう。私自身、「万が一失敗したら」と考えると親友にも知らない人にも宣言するのは怖い。だが、失敗を恐れていては何も始まらない。他人の目を気にせず、マイペースに生きる成瀬を私も見習おうと思った。

そして、特に印象的だったのは「たくさん種をまいて、ひとつでも花が咲けばいい。花が咲かなかつたとしても、挑戦した経験はすべて肥やしになる。」という言葉だ。物語の中で成瀬はお笑いの頂点を目指した。頂点をとることは出来なかったが、その結果、地元の祭りの司会が出来ることになった。この言葉が印象に残ったのは、私は失敗するのが怖く、挑戦をすることさえ諦めてしまうことが多かったからだ。挑戦をしなければ、もちろん結果が出ることもなかった。私に比べて成瀬は、失敗するのは悪いことでなく、むしろ失敗は次の挑戦に活かせる経験だと言っていた。私も、例えばトランペットで日本一を目指してみることは出来ただろう。

日本一が無理でも、その経験を活かして後輩を教えることだって出来たのではないだろうか。他にも、成瀬と島崎が突然漫才を始めたように、新しいことを始めて何かを目指すことも出来たはずだ。成瀬は私に、失敗しても次に繋がられるので挑戦は積極的にするべきだと教えてくれた。

「夏休みが終わるまでに、本を十冊読もうと思う。」と私は宣言してみた。もちろん、この挑戦が成功する確信はない。むしろ、普段あまり本を読まない私にとっては難しいかもしれないと思った。失敗する可能性がある挑戦を誰かに宣言するのは、私にとってとても勇気がいることだった。だが、他人の目を気にしていれば何も挑戦できない。もし十冊は読めなくても八冊でも九冊でも読んだら自分の力になるのではないか。そして、この挑戦をしたという事実は、次に挑戦や宣言をするときのハードルを下げることも繋がると思った。だから私はこの宣言をすることに決めた。成瀬に出会ったことは私の生活を変えるきっかけになった。この本を読む前の私は、やりたいことがあっても他人の目を気にしてしまい失敗が怖くて出来ない臆病者だった。しかし、今は「失敗してもいいから挑戦をしてみよう。」と思えるようになった。成瀬の生き方がかっこよくて魅力的だと思ったからだ。「たくさん種をまいて、ひとつでも花が咲けばいい。花が咲かなかつたとしても、挑戦した経験はすべて肥やしになる。」という成瀬の言葉は私を変えた。そしてこれからも救われるだろう。成瀬は私にエネルギーを与えてくれたと思う。

私は、挑戦をすること、そしてそれを宣言することと決して恥ずかしいことではなく、かっこいいことだと知った。自分の挑戦に、他人が自分をどう思うかなど考えなくてもいい。私も、成瀬のような自分のペースで「天下」を目指して本気で挑戦を続けるかっこいい生き方をしてみようと思う。

宮島未奈 著 『成瀬は天下を取りに行く』（新潮社）

◇高等学校

課題読書

つながる未来

奈良県立奈良北高等学校 二年 角 谷 日菜子

彼らの教室や成し遂げた成果は、青春そのものだと思う。題名にもそのような意味があるのかもしれない。また登場人物の心情は、私も経験があるものが多くて没入しながら一瞬で最後まで読み切ることができた。

読み進めていくと、「越川アンジェラ」という日比ハーフの女性が登場する。私は特に彼女のエピソードに共感し、物語にどんどん引き込まれた。私も彼女と同じように、逃げる口実を作ろうとしたことが、今までにたくさんあるからだ。

陽気でおしゃべりなアンジェラだが、勉強についていけないことに焦りを覚えていた。しかし、彼女が定時制に通うことを応援して忙しい中でも協力してくれる家族には、くじけそうになっっていることを言い出せずにいたある日、同じクラスのマリと言う女の子が全日制の生徒の黒田のペンケースを盗んだ疑いをかけられる。それをきっかけに黒田、マリ、アンジェラの間でトラブルが起こり、黒田は学校にアンジェラの退学を要求する。アンジェラは自分が退学することで丸く収まるならそれでいいと言う。しかし担任の藤竹は彼女にこんな言葉をかける。

「今回のことを投げ出す口実にしないでください。い。」

藤竹の言葉は、まさに私の心の中の代弁だった。思いやりがあつて、賢明な彼女が理不尽な理由で退学になって、すつきりと区切りがついた気になつて、勉強を諦めてしまうのは、とても悔しいと思つた。諦めようが諦めまいが彼女の勝手なのだけれど、私は諦めないでほしいと思つた。しかし、くじけそうでも前を向くことの大変さをきつと誰もが知つている。何かに正面から向き合う事は大変な労力を要することだ。経験と知識が時に私たちを臆病にする。だから私は今までたくさん言い訳をして逃げてきた。くじけそうでも辛かったから、楽な方を選んだ。失敗しても恥ずかしくないように保険をかけた。若しくは失敗をしないように挑戦することすら諦めたりした。辛いことを諦めるのにちやうど良い理由が見つかったとき、それに縋りたくなる気持ちをよく理解できる。

諦めることも大事な選択だ。それを選ぶにも勇気がいる。ただ、この本を読む中で私が感じたのは、考えることを放棄して立ち止まることをせず、諦めないで行動を続けることで見えてくるものもあるということ、そこからつながる将来もあるということである。実際にアンジェラは藤竹の言葉によつて勉強を続けることを選んだ。そして彼女が所属する科学部は、学会で優秀賞を獲得し、その小惑星探査計画に関わることになる。退学になつていては成しえなかつた未来が続いていたのである。

作品の舞台である都立高校の定時制に通う様々な事情を抱えた生徒たち。一度は何かを諦めた経験を持つ彼らが担任の藤竹の下で、科学部を結成し学会発表を目標として実験を繰り返す。彼らが新たに扉を選んで、その先へ進んでみようと思つたのは、彼らの心のどこかに、自分を諦めないという気持ちが残っていたからだと思う。どれだけ口実を重ねて逃げて、取り返しのつきそうにない地獄まで落ちていったとしても、生きていけるなら誰も未来を諦めていないのではないだろうか。そして、命がある限り、その気になれば何だってできる。ずっと先のことまで見通すことができる人はいない。先が見えない恐怖は計り知れない。しかしそれは絶望であると同時に、ほんのりと希望を秘めているように私は感じる。正解を自分なりに考えて、作り出して、選ぶことができるのだ。

正直、未来に希望があるからといって、闇の中でもがく時間が辛いことには変わりはない。絶望に蝕まれていたなら、未来のことを考えている余裕などない。今が辛いのだ。しかし、だからといって何もせずじろくまっつていられるばかりでは状況は変わらない。数字で途中計算を書くように実際に、手を動かす。次に進む扉を選ぶ。その先に続く道を歩いてみる。それを繰り返し。途中で藤竹が「人生は自動的にわかからない」と生徒に伝えている。想像するだけでも、知識として知るだけでもない。経験を通して得た汗も笑顔も涙も糧にしてこそまた進んでいける。能動的に生きていく。変わりたい、状況を変えたいと願うなら、きつと未来を選ぶ準備は

できている。あとは自分なりにもがいてみるだけだ。

この本を通して、歩いた軌跡が今につながることを実感し、日々一歩一歩進んでいくことを尊いと思った。人生は選択の連続だ。生きていてこの先どうなるかなど私にはわからない。それでもこれから何十年と生きていくことを願う。選んだ扉の先の道を踏みしめて歩いて行きたい。そして、どんなに険しくても次の扉につながると信じている。自分の未来を諦めない。

伊与原 新 著『宙わたる教室』（文藝春秋）

自由読書

『死にがいを求めて生きているの』を読んで

奈良県立高田高等学校 二年 渡 部 琳

この本を読もうと思ったきっかけは『死にがい求めて生きているの』というタイトルに惹かれたことだ。この一見矛盾しているような言葉を見たとき、どんな物語なのかとても気になったので、読むことを決めた。

この物語には、脳挫傷による植物状態で眠り続けている南水智也と、智也の幼なじみで献身的に見舞いに来る堀北雄介との間にある真実が、様々な人物を通して描かれている。

まず、私が一番驚いたのは、物語に描かれる二人の関係の見え方が最初と最後で全く違って感じられるところだ。最初の部分を読んだとき、私は二人の間にあるものは美しい友情だと思った。最初の部分は智也が入院する病院の看護師の女性つまり第三者の視点で書かれている。感動的な物語なんじゃないかと予感させるようなプロローグだが、物語が進むにつれて、だんだん歪んで見えてくる。智也による当事者の視点で書かれたラストで、雄介の真意がわかったときはゾクッとした。それと同時に気づいた。以前SNSでニュースを見たときに、第三者によるコメントだけを読んで判断し誤解してしまったことがあったからだ。その時の自分と同じ見方をしていたと気づき、物事を第三者の視点からただで判断してはいけないと痛感した。物事を考えるときは、当事者の視点や様々な方向から見てみて、自分でよく考えることが大切だと強く感じた。

まず、私が一番驚いたのは、物語に描かれる二人の関係の見え方が最初と最後で全く違って感じられるところだ。最初の部分を読んだとき、私は二人の間にあるものは美しい友情だと思った。最初の部分は智也が入院する病院の看護師の女性つまり第三者の視点で書かれている。感動的な物語なんじゃないかと予感させるようなプロローグだが、物語が進むにつれて、だんだん歪んで見えてくる。智也による当事者の視点で書かれたラストで、雄介の真意がわかったときはゾクッとした。それと同時に気づいた。以前SNSでニュースを見たときに、第三者によるコメントだけを読んで判断し誤解してしまったことがあったからだ。その時の自分と同じ見方をしていたと気づき、物事を第三者の視点からただで判断してはいけないと痛感した。物事を考えるときは、当事者の視点や様々な方向から見てみて、自分でよく考えることが大切だと強く感じた。

物語の中でも特に「平成」という時代設定に共感できた。物語の舞台となっている、人と比べなくていい、ナンバーワンよりオンリーワン、個性が大事だといわれた平成の時代。自分で自分を評価しなければいけないという生きづらさを抱え、苦悩し、生きがいを求めている登場人物たちには、自分と重なる部分がたくさんあった。認められなくて、手段と目的が逆転してしまっている。自分は生きている価値のある人間だと思いたい。死ぬまでの時間役割が欲しい、それは「生きがい」ではなく「死にがい」なんじゃないか。そんな登場人物たちの放つ言葉、受けた言葉が、読んでいる私に突きつけられているように感じた。なぜなら、私自身、自分の生きがいについて考えたことが何度もあったからだ。最近になって、高校卒業後の進路や将来どんなことをしたいのかといった未来のことについて考える機会が多くなった。そのとき、私は何をしたいんだろうか、私が本当にしたいことは何か、私の生きがいは何なのかとよく自分自身に問いかける。そして、はっきりした答えが出ないままモヤモヤして終わってしまう。それが、私に限ったことではなく誰もが抱えていることなんだとわかった。

さらに、登場人物たちが悩みなながらも必死で生きていく姿を見て、私も自分自身とむっとなき合わせなければいけないと気づかされた。

印象に残ったのは、物語の終盤、聴覚だけが戻った智也が頭の中で反芻した「この世界で生きている以上、誰もが必ず繋がっている。繋がってしまっている」という言葉だ。これは、異常なまでに生きがいを追い求め続ける雄介に向けられたものである。誰かのためにやりたいこと、自分自身がやりたいことがあるのはすばらしいことだと思う。生きがいを見つけたという雄介の気持ちに共感するところもあった。しかし、生きがいは目に見えないもので、追い求めたからといって手に入るとは限らない。

智也の言葉を読んで、私は特別な生きがいは必ずしも必要でないのではないかと考えた。私たちは生きているだけで誰かに少なからず影響を与え、与えられている。例えば、友達と話している中で新

しいことを知ったり、逆に教えたり、何気なく見ていたテレビ番組で流れた曲を大好きになったり、生きていけば何かしらの出会いや発見が必ずある。それだけで生きていく意味があるのではないか。だから、自分にとってつらいことばかりの世界でも頑張るって生きていくしかない。私は、こんな「生きがい」のあり方もあると考えた。

物語を通して、考えさせられたり気づかされたりする言葉や共感できる場面がたくさんあり、自分自身とじっくり向き合うことができる一冊だった。これからは、登場人物たちのように生きがいについて悩みながら、自分の生き方を考えていきたい。その中で、いつか自分なりの「生きがい」を見つけたらいいと思う。生き方や生きがいという難しいテーマを掲げながらも、登場人物たちに感情移入でき、自分自身について考えさせられる最高の一冊だ。ぜひ多くの人に手にとってほしい。

朝井リョウ 著『死にがいを求めて生きているの』
(中央公論新社)

奈良県学校図書館協議会賞

◇小学校低学年

課題読書

『アザラシのアニュー』を読んで

奈良育英クラブ小学校 一年 藤村 萌奈

私は、本をよむことがとても好きです。でも、一さつえらぶとなるとすぐくまよいました。

なぜこの本をえらんだかというと、アニューという名前とえが一ばんきにいゝたからです。

アニューはタゴトアザラシの子どもです。さしよは、お母さんといっしよだったけれど、ある日、お母さんはアニューをおいて、ほつきよくへおよいでいってしまったのです。

アニューはからだがいいるにかわつたら、ほつきよくまでくるといわれ、その日からひとりぼっち。私だつたら、ぜつたいにいやです。どんなときもお母さんには私のそばにいてほしいです。

でも、そんなよわい気もちにならず、アニューはいっしよけんめいきよとします。力がつよくななくても、きもちがつよいと、とても大きなパワーにつながるように思います。そのパワーがあったからこそアニューは、「なかま」にあることができたのです。こころによゆうがあると、まわりをみることもみえせん。はんたいによゆうがないとな

私も、うまくいかずなってしまうことがあるけど、ないただけではなにもすみません。フーッとじゅもんをかけると、ふしぎなことに気分もおちつくし、じつは私のちかくにたくさんおうえんしてくれる人がいることに、気がついたりします。

アニューもそうだけど、やっぱりおうえんしてくれる人はひつようです。それは、よりつよいパワーへとつながっていくのです。

私も、かぞくやまわりのおともだちのみぢかなおうえんだんになりたいです。もちろん私もアニューのおうえんだんのひとりです。

ほつきよくでアニューは、お母さんにあえたかな？きつと、私は、あえたとおもいます。

あずみ虫 作 『アザラシのアニュー』(童心社)

自由読書

おいしいうれしいマドレーヌ

大和郡山立郡山南小学校 一年 池上 史 葉

わたしは、あまいおかしをつくつたり、たべたりすると、うれしくなつてしあわせだなとおもいます。このほんの、マドレーヌがどんなおかしかしらなかつたのでよんでみたら、ケーキみたいな、みんながよるこぶおいしいおかしなんだとわかりました。

ほんにでてくるわかったさんは、クリーニング屋さんで、せんたくものはいたつにいくとちゅうで、マドレーヌひめのでしたから、
「ケーキのつくりかたをおしえないと、かいがらのあめをふらせる。」
といわれてしまいます。

かいがらのあめは、わかったさんはこわそうだったけれど、わたしはえがかわいくて、かいがらをあつめて、パパとママといもうとにわけて、みんなであそびたいなとおもいました。

おかあさんと、ほんのとおりマドレーヌをつくってみました。あわだてきでまぜるときは、わたしもすぐにくたびれておかあさんにてつだつてもらおうとしました。でも、

「マドレーヌひめは、じぶんでしたよ。」
とおかあさんにいわれました。いやだったけど、がんばってまぜました。つくりかたがいろいろあつてたいへんだけど、ほんをよんでいたときみたいに、どんなマドレーヌができるのか、ドキドキしました。

オープンでやっていると、あまくていいにおいがしてきて、マドレーヌはすごくおいしいおかしかもしれないとワクワクしてきました。できたてを食べると、あたたかくてフワフワで、マドレーヌひめがおいしくてとびあがったみたいに、わたしもおいしくてうれしくなりました。

わかったさんのマドレーヌは、つくっているとときは、しんどいときがあつたけれど、たべてみると

あまくてしあわせになって、みんながよろこぶだ
いすきなおかしになりました。

寺村輝夫 作 永井郁子 絵『わかったさんのマドレーヌ』（あかね書房）

◇小学校中学年

課題読書

あなたの行動が世の中をかえる

奈良市立登美ヶ丘小学校 三年 小幡 優仁

ぼくは、ストローで飲みものを飲むのが好きです。ストローを使った方が飲みやすいし、おいしく感じるからです。だから、この本の表紙の、ストローやペットボトルでよごれた海岸で、悲しそうな表情をしている生きものたちを見た時、「もしこれがぼくの使ったストローだったら」と、少し心が苦しくなりました。

五千年以上も前、麦のからやおりをよけてビールを飲むために、葦を使った一番古いストローが発明されたそうです。それから世界のあちこちで、植物のくきで作られたストローが見られるようになりましたが、くきのストローは草の味がしたり、じやりじやりのカスが出るため、紙を使ったストローが作られるようになりました。しかし、紙のストローは、ぬれるとはがれてばらばらになるという問題が出てきます。こうして、安くてじょうぶなプラスチックストローが作られるようになりましたが、今度はそれが海をよごし、海でくらす生きものたちをおびやかしているのです。

プラスチックは、土の中でしぜんにくさったり、水にとけたりしません。たっただけだけ使われてすてられたものが、おそろしいほど長い時間のこりつづけると知っておどろきました。

科学者によると、世界中の海岸では八十三おく

本ものストローが見つかるだろうと言われていま
す。とてつもない数に感じるけれど、問題を知ること
が、よりよい未来につながる小さな一歩になる
のです。ぼくは、この本の「知ること」で気になりは
じめ、気になれば変えられる。」という言葉が、強
く心に残りました。ぼくたちにも、できることはた
くさんあります。飲みものをコップからちよくせ
つ飲んだり、紙やステンレスなど、なんとも使える
ざいりようでできたストローを使ったり、学んだ
ことを他の人に伝えたり。ぼく一人では、大きなこ
とをなしとげる力はないけれど、習かんを変える
小さな一歩が次の一歩につながって、問題のかい
けつにつながるのだとはげまされました。

ぼくの小さな一歩は、ステンレスのストローを
使うことです。お父さんとお母さんといっしょに、
持ち歩けるマイストローを買いました。ぼくたち
一人一人の行動を変えることで、世の中に変化を
もたらすことができること知り、自分になができ
るか考えつつづけること。それが、かんきょうを守る
ためにぼくがふみだした第一歩です。今はまだス
タートにすぎないけれど、いつかきつと、よりよい
未来を実現できると思います。ぼくたち人間は、何
千年も前から、少しずつ問題をかいけつしてきた
のだから。

デー・ロミート 文 ズユエ・チェン 絵 千葉
茂樹 訳『さようならプラスチック・ストロー』（光
村教育図書）

課題読書

『じゅげむの夏』を読んで

奈良市立三碓小学校 四年 柿坂 くるみ

この物語は、筋ジストロフィーの親友のねがい
をかなえるためにぼうけんを計画する少年たちの
お話です。かれらは四年生で、みんなが住んでいる
山あいの村は自然がゆたかかでのページからも土
や緑のにおいがたちこめていました。わたしもい
っしょにぼうけんしているような気持ちで読み進
めました。

わたしが一番心にとったのは筋ジストロフィー
十のかつちゃんという少年が、川に飛びこむとい
う場面です。少年たちの住む天神集落には、子ども
たちが代々受けついできたならわしがあります。
そのひとつが、天神橋からの飛びこみでした。たい
がい三年生ぐらいまでには、みんなそのぎ式を行
います。飛びこめた者は、小さな子どもをそつ業し
たような気持ちになります。かつちゃん以外の三
人は、三年生までに飛びこんでいました。だからか
つちゃんは、どうしても今年の夏に飛びたいと言
ったのです。かつちゃんが飛びこむとき、友達が一
来い！受けとめるからだいじょうぶ」と言って飛
びこみますが、受けとめられず水の中であつちゃん
んはハチャメチャにもがきます。そして、友達に助
けられてうきわを使つて岸に上がりました。ぼう
けんは、大成こうでした。わたしはこのシーンを読
んで、一学期のプールの授業を思い出しました。わ
たしはクローラーがうまくできなくて、ビート板な

しだとおぼれそうで勇気がなかなかでません。で
勇気がなかなかでません。プールでもこんなにこ
わいのに、橋から川に飛びこむなんて考えられま
せん。最初、わたしはかつちゃんのことを病気をか
かえてかわいそうだと思いました。でもと中から、
かつちゃんの勇気をそんけいするようになりまし
た。かつちゃんは、なぜこんなに勇気を持つて飛び
こめるのか。それは、友達がいるからだと思います。
この友達はみんな、かつちゃんのことをかわいそ
うと思つていません。かつちゃんのがんばりをみ
とめて同じ目線で見ます。そこにはきずな、信らい、
友情があります。わたしにはたくさん友達が
いますが、いっしょにいて楽しいという気持ちで、す
ごしてきました。これほどまでのきずな、信らい、
友情は、まだ感じたことはありません。今の友達と、
時間を重ねてかつちゃんたちのように、きずなを
深めていきたいです。今は、少し見つけ始めている
きずなだから。

きずなとは、人と人とのむすびつきを意味しま
す。これは、とても大切なことだと思ひます。人は、
みんな一人では生きていけません。支え合つたり、
助け合つたりすることでみんなつながっています。
病気の人もみんな同じです。相手をみとめて、助け
が必要なら協力していっしょにがんばる。わたし
は、この想いを大切にしてこれからもすこしてい
きたいです。

最上一平 作 マメイケダ 絵 『じゅげむの夏』
(佼成出版社)

自由読書

たからもののような大切なできごと

葛城市立新庄小学校 三年 大 脇 莉子

わたしは、二年生の十一月にこかんせつのほねの手じゅつをして一ヶ月入いんをしました。ほねがくつづくまで歩くことができなかったのですが、たいいんしても家ですごさなければなりませんでした。学校に通えるようになったのは三学期になってからで、体育のじゅ業や外で遊べるようになったのは三年生になってからです。

わたしが読んだ本に出てきた小学五年生の女の子「ことり」は、体そを習っています。大きくなったらオリンピックに出たいので一生けん命がんばっていたのに、練習中にこっせつをして手じゅつをすることになりました。三週間入いんをして、たいいんをしてもほねがちやんとくつづくまで体そうはお休みです。「もう体そうはできないかも。ゆめがかなえられない」と思い、なみだがあふれて元気もなくなってしまいます。

「わたし」と「ことり」、手じゅつや入いんてふ安な気持ちになったこと、同じだ!と思いました。手じゅつはどんなことをするのか分からなくてドキドキしてなみだがポロポロ出ました。学校をお休みして友だちと遊べなくなることもいやだったし、お休み中にみんなわたしのことをわすれないかすごく不安でした。だけど入いん中のわたしがさびしい思いをしないようにクラスやなかよし

のお友だちが手紙をくれました。おじいちゃん・おばあちゃんが入いん中、毎日テレビ電話でゆう気づけてくれました。かんごしさんやお母さんは、ギブスで動けないわたしのお世話をたくさんがんばってくれました。学校に通えるようになった時も、久しぶりの学校でドキドキしてないでしまったけど、なかよしのお友だちがろうう下で待っていてくれるのを見て、すごくうれしくて心がポカポカになりました。

「ことり」もわたしのようにふ安な気持ちでいっぱいでしたが、びょういんで出会った人たちのおかげで気持ちがかわりました。

「だれにも、明日の運命はわからない。だれだってふいにびょう気になったり、天さいや事こでケガをするかもしれない。でもそれをのりこえて活やくしている」そう気づきこっせつ前よりも強い気持ちを手に入れて体そうをがんばる「ことり」はキラキラしていてすごくかっこよかったです。

入いんも手じゅつもとてもかわかったし、いたい思いもたくさんしたのでやっぱりもう同じことはしたくありません。でも家族、先生、友だち、びょういんで出会った人、たくさんの方がわたしのためにくれた「やさしさ」は、たからものように大切にできごとです。

「ことり」のようにこれからどんないやなこと、こわいことがあっても、かわりにもつとよいことが手に入ると思っています。がんばっていききたいと思いました。

小林深雪 作 いつか 絵 『スポーツのおはなし 体操 わたしの魔法の羽』(講談社)

自由読書

気持ち良くすごすための取扱説明書

奈良市立青和小学校 四年 田 積 芽 依

わたしはこの本を読んで、てつやのお母さんはすごく強くてパワフルで面白い人だと思いました。そして、一番まわりの人をよく見ていて、かしい人だと思いました。

さい初は、てつやはお母さんの事、きらいとまでは言わないけど、ちよつとうるさく思っていてあんまり好きではないのかなと思いました。しかし、この本を読み進めていくうちに、てつやはお母さんの事がすごく好きなんだと感じました。そして、お母さんの事をよく見ていて、理かいているからこそ、『かあちゃん取扱説明書』をかん成させる事ができたんだと思います。

『かあちゃん取扱説明書』は、てつやが毎日かいてきにするために作ろうと思ったものです。かん成させた『かあちゃん取扱説明書』の通りしたら、夜ご飯にすぎな物を作ってもらえたり、しつぱいしてもおこられなかったり、てつやの思い通りの結果になって大成こうだと思いました。でもてつやはいつもの母ちゃんらしくなくて元気がなくなっていました。けれどてつやのお母さんが

良いように変わったのは、てつや自身が成長したからでした。その事をお父さんに言われ、てつやのお母さんは一枚も二枚も上手で、やっぱりかしこい人だなと思いました。

うちのお母さんは、てつやのお母さんとは共通する部分もあるけれど、あまりにいません。どちらかと言うと四年生になっても忘れ物をとどけてくれるカズのお母さんになっているかもしれません。わたしには五才下に妹がいます。それまではお母さんを一人じめできていたのに、妹が生まれてからは妹をゆうせんする事が多くなりました。その事が少しだけですがずっと不満です。毎日お母さんの取り合いです。お父さんが二年前から海外に単身ふにんしてからはさらに取り合いでゆつくり話をする事ができない日もあります。そうなる、わたしと妹はケンカになるし、お母さんもイライラしてきます。だから、まずはお母さんの取り合いにならないように「妹の取扱説明書」を作ろうと思います。

お母さんとわたしの時間を作るための「妹の取扱説明書」は、妹といっしょに折り紙をしたり、おにごっこをしてつかれさせてねむくさせたらいいんだと思いました。あとは、先に妹に話させてからわたしが話す。書いたらかんたんに思えるけれど、いざその通りにしようと思うとなかなかうまくいきません。妹は五才なので早くもう少し大人になつてほしいです。

「取扱説明書」は家族だけではなく、友達の間もあるとべん利だなと思いました。てつやの『かあちゃん

「取扱説明書」の様なりっぱな物は難しいけれど、かんいばんを作ってみようと思えました。期待したような結果がでない事もあるかもしれませんが、その都度かい良しいこうと思えます。毎日、わたしも、みんなも気持ち良くすごせたらなと思えます。

いとうみく 作 佐藤 真紀子 絵 『かあちゃん取扱説明書』(童心社)

◇小学校高学年

課題読書

強い心

生駒市立生駒台小学校 五年 辰 己 実 祐

この本を読み、感じたこと、思ったことが三つある。一つ目は、「協力」だ。災害がなくても、もちろん大切だ。「協力」をすることで、仲が深まったり、物事が早く進んだりする。災害時でも同じだ。悠太くんたちは、苦しくても、さみしくても、こわくても、悲しくても、心配でも、協力していたのだ。そのすがたに、とてもたくましく感じた。一人ではなく「協力」をして、みんなが災害をのりこえていたのだ。二つ目は「言葉」だ。「協力」もそうだが、私も経験したことがある。「言葉」とは、人を幸せにしたり、自分がうれしくなったりするものだ。声をかけて、返事をもらうだけで、うれしくなる。幸せが広がっていくのだ。一言うれしくなる「言葉」を言うだけで、何人も何人も笑顔になっていくのだ。幸せのキャッチボールみたいなものだ。「言葉」とは、心と心がつながる大切なものだと思う。それに、うれしい言葉「幸せ」だと思った。最後の三つ目は災害にたち向かう「強い心」である。愛媛県に旅行に行っているときに急に母のスマートフォンから地震を知らせるサイレンが鳴り出した。テレビをつけてみると、津波注意報が発表されていたのだ。私は大きい地震がこないようにとても

願っていた。すると、ふと頭によぎったことがある。それは、悠太くんたちのたくましくなかった。

そのときはこわくて、あまり覚えていなかったの
で家で考えてみた。すると、私は自分の中にいる自
分が自分に、「悠太くんたちがたくましく災
害に立ち向かってね。」

「がんばってね。」

と言ってくれていたのかな。と思った。実際には被
害は起きていないけれど、もし災害が起きた場合、
悠太くんたちみたいに、悲しき、苦しきがあふれて
くると思う。それでも悠太くんたちは災害に立ち
向かっていったのだ。私もそうなりたいな。「うん、
そうなるう。」と心に決めた。今回の地震の震源地
となった宮崎県の人々や町のことを思うと、とて
も苦しくなる。それに、南海トラフが起きると、
も苦しくなる。私は悠太くんたちに、たくさん教え
てもらった。「協力」の大切さ、一丸さ、「言葉」
で会話をしているときの幸せさ、うれしさ、そして、
「災害」に立ち向かう心、前を向いて進んでいく心。
色々教えてもらった。私は悠太くんたちのことを
大先輩として見習っていききたい。悠太くんたちは
はじめ、大先輩たちの後を追って行く。そう決めた
のだ。もし南海トラフが起きると、私の中ではいま
までに経験した地震の中で一番大きい地震になる。
何がおきるかは、分からない。でも、そのとき、ど
う感じたか、どう思ったか、その気持ちを一生の宝
物として、大切にしながら、生きていきたい。地震、
災害に負けずに進んでいく。弱い自分ではない、強
い自分になるう。そう決意した。

田沢五月 文『海よ光れ! 3・11被災者を励ました学
校新聞』(国土社)

課題読書

心の豊かさが救う未来

智辯学園奈良カレッジ小学部 五年 大 林 莉々果

「よかった!」

最後のページを読み終わり、本を閉じた後私は
心が温かくなって涙があふれてきました。戦争中
という怖くて辛いことしかないと思っていました
たが、そんな中でも人と人のつながりや相手を
思いやる心を持ち続ければ、きっと幸せな未来へ
とつながっていくのだと感じました。

このお話は、第二次世界大戦中のイギリスで、両
親がいなくて三人きょうだい、育ててくれたおば
あ様までなくなってしまうところからはじまり
ます。戦争中で養子縁組が難しく、この先子どもた
ちだけでどうやって生きていけばいいのだろうと
いう絶望の中、弁護士提案で学童疎開に参加し
ます。他の子どもたちとは違い、三人には帰る場所
がありません。だから、疎開先で意地悪をされても
たえて、辛いことや嫌なことやるしかないとい
つも支えあっていました。特に一番上の兄のウイ
リアムは自分も十二歳の子どものなのに、いつも弟
と妹のことを気づかっがまんしていました。兄

のそんな姿を見ていたからこそ、下の二人は兄を
信頼して一緒に辛い日々を乗り越えていったのだ
と思います。

私には五歳下の弟がいます。かわいいし、一緒に
いて楽しいですが、けんかをして顔も見たくない
と思うこともあります。でも、このお話を読み進め
るうちに

「何があっても私が絶対に弟を守りたい」

「弟と一緒にいる時間をもっと大切にしたい」

と、だんだん弟に対しての思いが強くなって
のを感じました。私は家族と暮らす中で自分を優
先させてしまい、何かあれば誰かが助けてくれる
という甘えがあります。でも、そんな考えでは誰か
を守ったり幸せにすることなんてできません。相
手を思いやる強い心を持って行動できるようにな
りたいです。

私は戦争を実際に経験した親戚の話聞いたこ
とがあります。食べたい時にごはんを食べられな
い、勉強したいのに勉強できない時代を過ごした
人がいたことを思い出すと、今自分がやりたいこ
とができる時間はとても貴重だと思えるようになり
ました。

戦争は戦争をする人だけではなく、そこに住ん
でいた人まで巻き込み、生活をうばってしまいま
す。でも主人公の三人きょうだいがあるように
うに、辛いことがあった時や大変な時でも思いや
りの心を持っていれば心と心がつながり、一番欲
しかった「新しい大切な家族」という宝物を見つけ
ることができたのだと思います。

未来の扉は、当たり前毎日の毎日は明日も当たり前
に続くとはかぎらないこと、だから今日一日を一生懸命に生きることで開くと思えます。私に、今ある幸せを大切にしないといけないことをいつも教えてくれます。

ケイト・アルバス 作 榎田理絵 訳『図書館がくれた宝物』（徳間書店）

自由読書

誰でも明日はかがやける

天理市立樺本小学校 五年 矢尾 愛葉

私は生まれた時からずっと犬のいるくらしをしています。犬は日々の生活と私達家族の心をとても豊かにしてくれます。私の心が元気な時は一緒に遊ぼうとさそって来たり、悲しい時やつかれてる時には寄りそってくれます。家族ひとりひとりの表情を見てこの人は今どんな気持ちでいるのかをすぐに読みとる能力があるように感じます。

だから、犬のこともっと知りたくなっている。いろいろな図かんや本を読むようになりました。その中で問題行動を起こしてしまう犬や、障がいを持って生まれた犬、保護犬の存在を知りました。幸せでない犬を助けるために私ができる事は何だろうと考え、もっと勉強してひとりでも多くの人に伝える事だと思い本を探しに行った時にしば犬『未来』の本に出会いました。

主人公の未来はぎやくたいにより足や目に障がいを持ちほえる事も制限され心にも傷を負った捨て犬です。未来の右後ろ足は足首から切断され、左後ろ足も指から先が切れ肉球が少ししか残っていません。未来の飼い主はどうしたら未来が歩けるようになるのか考えます。

芝生や海岸の砂浜を走らせることできん肉がつき、走ったりジャンプしたりできるのではないかと訓練を始めようと思いました。すると飼い主の心配をよそにすぐに跳びはねかけ回りました。なにもを欲しがらぬより今あるもので幸せと喜びを手に入れます。

私の愛犬もヘルニアをわずらった経験があります。グレードが高く手術をしても歩けるようにならないか分からないと動物病院の先生に言われた時、愛犬がこれまでのように生活できなくなってしまうのがかわいそうと悲しくてすごく泣きました。家族で話し合いをして何もしないでこのまま歩けない生活を送るよりも、手術をして歩けるようになるかもしれないという選択をしました。

手術は成功して立ち上がれるようになりました。歩けるようになるまでは長期間のリハビリが必要になり少しだけ歩けるようになった頃、散歩で出会う人々に「どうしたの。かわいそうだね。」と何度も言われました。その言葉を聞く度に愛犬に歩けるようになるうねと約束をし、私達家族のエネルギーに込めるように愛犬はリハビリをがんばり、見事歩けるようになったのです。

私はこのすがたを見てあきらめない愛犬の強さと努力から自分自身つらい事や苦しい事があってもにげ出さないで今を一生けん命生きるという事を学びました。

誰にでもかがやける場所がある。あきらめず努力すれば明日は必ずかがやくということを教えてもらいました。

今西乃子・著 浜田一男・写真『捨て犬・未来』あわせの足あと』（岩崎書店）

◇中学校

課題読書

希望のひとしずくと私

奈良女子大学附属中等教育学校 一年 村上心映

この本を読んで最も私の心に残ったのは、アーネスト先生が言った、「物語は人間を結びつける。つながりをつくってくれるんだ。たとえそれが作り話でもね。」という言葉だ。

日本にも古くから民話、神話や伝説がある。どうしてつくられたのだろうという疑問を以前から持っていたが、おそらくそれらの話が実話かどうかは重要ではなく、その当時の世の背景から、人々をつなげたいという願いによってつくられ、考えだされた物語なのだろうと私の中で答えを見つけた気がした。また、「いたいのいたいのとんでいけ」をはじめとしたおまじないも、それで私の痛みが消え去ったことは経験上一度もないが、本当の目的はこどもの痛みを親や周りの人が心配することによって、こどもに親や周りの人とのつながりを感じて安心させることなのだろうと気づいた。アーネスト先生も、先の言葉に続けて、「トンプキンス井戸が願いをかなえてくれたのかどうかはわからない。でも、それはどうでもいいんだ。ライアン、きみたちがたくさんの人を助けたのは知っている。わたしにとっては、大切なのはそこ

だけなんだよ。」と言っている。人とのつながりと、人の幸せを願う気持ちを行動に移すことの二つの大切さを、この本から教わった。

人とつながるためには、相手の背景や考えを知り理解する必要がある。アーネストのお父さんが何より重要だと思う。アーネストのお父さんがかくしごとをしてわかった、これからは家族のことをアーネストにきちんと正直に話すと約束して、家族の雰囲気がよくなっていく場面や、いじめっことして中学校の全員から恐れられていたトミーが、絵を描くことを通じて、友達を欲しがっていたウインストンに自分から近づき、親友になり一人ぼっちではなくなった場面からも感じることができた。

そういう私はどういうと、思春期のせいもあるのだろうが、小さかったころに比べて最近親との会話がずいぶん少なくなったと感じる。それは、私から話さなくなったからに他ならない。私には好きなアーネストグループがある。その魅力が友人や弟妹とは共有したいと思うが、親には話そうと思えなかった。私の好きなことを否定されるのではないかという不安があったからだ。だから、私は親に隠れてそのグループの動画を夢中になって見ていた。しかし、この本を読んで、私の好きなことを話してみてもいいのではないかと思った。どのような反応をされるかわかったが、意外にも「人によって好きなことや好きなものが違うのは当たり前。そういうところが魅力的なのか教えて。」と、私の好きなことに理解を示してくれた。今まで

多少の後ろめたさを感じていた私だったが、この日を境に私の気持ちも軽くなった。話をし、コミュニケーションをとることで、私の考えを理解してもらえ、親の思いや考えもよく理解できるようになった。やはり、人と人はつながってこそ幸せを感じることができのさだろうということが実感できるようになってきた。

この本に出てきた Cliff Donnelly という町は、看板がいたずらされ、Holly の文字だけが浮かびあつた通称「残念な町」になってしまった、とあつた。私はこの町は人と人とのつながりの少ない、たった一人という意味の only な町、と感じながら始めは読み進めていた。しかし、ライアン、アーネスト、リジーがトンプキンス井戸に通うようになり、だんだんと町の人々のつながりが出てきて明るい兆しが芽生えてきた。そして最後には、if only の町の看板を、トミーとウインストンが再びクリフ・ドネリーと書き直す場面が出てくる。町全体に漂っていた「残念さ」が「希望」に変わってきた。そんな町になってきたことを象徴している。「希望」に変えたのは、アーネストの祖父の家の屋根裏にあったものではなく、トンプキンス井戸に話や願いを言いに来た人たちへのライアンたちの幸せを願う心や、うまくいかずに落ち込んでいる人々への思いやりの心、そして気持ちを実際に行動に移したとことだったのだと思った。

人は思いやってもらえることで、一人ではないと安心でき、心に余裕ができるので、その人もまた人を思いやることができる。それは、まるで、幸せ

を願う希望のひとつが、水面に落ちてできた波紋のようにまわりにひろがり、幸せとなつてつなぐようになっていくように…。

私は、物語やつくり話がなくても他人を思いやり、希望のつながりをつくれる人になろうと心に決めた。

キース・カラブレレーゼ著 代田亜香子訳『希望のひとつとしく』(理論社)

自由読書

平和な世界をつなげるために

大淀町立大淀中学校 一年 米 田 菜 央

人はうまれる時代や場所を選ぶことはできない。私たちが今生きている時代が戦争をしていた時と比べてどんなに恵まれているかを、『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』を読んで改めて考えさせられた。

主人公の中学生の百合は、母親とケンカをして家を飛び出し、裏山にある防空壕へ行った。目を覚ますと、そこは戦時中の日本だった。偶然通りかかった彰に助けられ、彼と過ごしていく内に百合は彰を好きになるけれど、彰は特攻隊員で、もうすぐ出撃しなければいけなかった。今から八十年ほど前、本当にこの日本で実際にあったこと。国のため、家族を守るため自分の命を犠牲にした特攻隊。たくさんさんの若い人たちの命が消えていった。百合は

自分の命を犠牲にしようとする彰たちの考えが理解できずにいた。

私がおもひ、自分がこの時代に生まれていたら、自分はもうどうしていったらもうと考えた。六年生の時に行った広島への修学旅行を思い出した。理不尽に奪われたたくさんさんの命、その中には、もちろんみんなそれぞれ大切な人がいたはずで、生きて帰ることがないとかわかっていて戦争に、

「ばんざい」

と言つて送り出さないといいなかった、と思うと言葉にならないぐらい辛い。それでもこの時代に生きた人たちは、悲しみをこらえて生きていたのがすごいと思つた。私にはそんなこときつと悲しすぎて辛すぎてできないと思う。私も百合と同じ気持ちだなあと思うところがたくさんあつた。

物語の中で百合が自分の思つたことをまっすぐに言つてしまう場面がいくつもある。その中でもいちばん印象に残つた言葉がある。百合が彰に言つた、

「・・・特攻なんて、自分で死ににいくなんて、馬鹿だよ。そんなの、ただの自殺じゃん・・・。馬鹿だよ、特攻を命令した偉い人も、それに従つてる人たちも、みんな馬鹿。やめればいいのに。逃げちゃえばいいのに。」

本当にその通りだと思つた。今に時代に生きる私たちからすれば、当たり前のことだけれど、「お国のために戦争に行くのは当然、戦場で命をなくすことも名誉なことだ。」

という価値観の中で生きなければいけなかったことは、私の好きなことに理解を示わかるけれど、それでもそんな考えは理解しがたい。たくさんの人たちがそんなことおかしいと思つても言えない時代つて、本当嫌になる。

物語の後半に、特攻を志願していたが、「俺は・・・行きたくない。・・・死にたくないんだ。」

と言つて逃げ出した特攻隊員がいた。その隊員に彰が、お前は生きて守れ。俺は、死んで、守るから。という言葉と言つた。とっても悲しくて、切ない言葉だと思つた。好きな人との永遠の別れ、その人が抱えていた本当の想いに気づかないといけない。

この物語を読んでいると、私たちは、戦争というものを知らないが、疑似体験ができ、二度とこのようなことを繰り返してはいけないと、体験することができる。本当に経験した人たちが味わっていない、匂いや温度、五感を使った体験はできないけれど、こういった歴史があつたことを想像することはできる。特攻隊員を好きになつてしまった百合。そして彰の気持ちを知つた最後の手紙のシーンに感動した。苦しい戦争の時代にタイムスリップしてしまふ、そこに生きることによって、百合が生きていた時代では気づかなかつた大切なことに気づいていく百合の姿が心に残つた。彰から百合への最後の手紙から、本当に百合のことを愛していたことが痛いくらい伝わってきた。彰は、本当は手紙ではなくて、百合に直接言いたかつたんだらうと思うと、切なくなつた。

今も世界のどこかで、戦争が行われている。戦争や内紛、ニュースでは空爆やテロ、傷ついたり子供たち、家族を失って泣き崩れている人たちを見るたびに、どうしてこんなことがずっとなくならずに行われているのか、と腹が立つ。昔の人たちが自分の命と引き換えに教えてくれたのに、戦争がなくなることは、残念だけど悔しいけど無いだろうと思う。でも戦争の悲惨さを忘れてはいけない。現代に生きる私たちには、こんな悲惨な戦争があり、たくさんの人々が亡くなっていったことを絶対に忘れてはいけない。美味しいものを食べられる、やりたいことができる、友だちと笑いあえる、健康に生きていける、今の時代に生きることが幸せであることを実感し、いろんなことに感謝して、百合と彰のように、いつか大切な人と出会えればいいな、と思った。

また、自分でもできることから、いつか戦争がない、みんなが平和に生活できる時代がくるように、少しでも次の世代につなげられるような行動をしていきたいと思った。いつか平和な世界になるように願いたい。

汐見夏衛 著 『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』(スターツ出版)

◇高等学校

課題読書

「信じる」

奈良県立磯城野高等学校 二年 佐藤 友 姫

私は『宙わたる教室』を読むまで、定時制高校に対してあまり良いイメージをもっていなかった。しかし、本を読み終えたとき、そんなイメージをもっていた自分を恥じた。未来を信じて困難に立ち向かう人が通う学校なのだと思ったからだ。

この本には、定時制高校に通っているさまざまな事情や悩みを抱えた生徒が、理科教師の藤竹とともに科学部を立ち上げ、学会発表に至るまでの困難とその克服に必死に格闘する姿が描かれている。困難を乗り越えて成長していく姿に感動した。そして、私はこの本の最後に出てくる「その気になりさえすれば、何だってできる」という言葉にたいへん勇気付けられた。

現在、私は高校二年生だ。今年の夏が終わると高校生活のおよそ半分が終わってしまうことになる。そろそろ進路について真剣に考え始めなければいけない時期だ。四年制大学に進学したいという気持ちはもちろんあるが、過去に失敗した経験から自分のことを信じることができず、きつと次も失敗するだろうと心の底から感じている。私は、高校受験だけでなく、中学受験も経験したが、その受験で第一志望の学校から不合格通知が届いたとき、

行きたい学校に行けない悔しい気持ちと、ずっと支えてくれていた両親に対して申し訳ない気持ちで押しつぶされそうだった。何とか気持ちを切り替えられたことで、第二志望の学校に受かったが、その後の私の人生は全て自分の思い通りにならなかった。受験が終わったことで勉強から解放され、やつと友人と遊べると思っていた矢先、新型コロナウイルスの感染者が国内で発生した。そのまま勢いが収まることはなく、緊急事態宣言が発表され、学校は休校になり、遊ぶ約束をしていた友人と遊ぶことができなくなってしまった。規模縮小で行われた卒業式が終わり、春休みが始まった。中学校から届いた課題に一人で向き合うだけの春休みは、もちろん楽しいことなど一つもなく、勉強に対するやる気も、第一志望の学校に受からなかったときの悔しい気持ちも、自然となくなっていた。六月によく入学式が行われ、本格的に中学校生活が始まったが、怠けていた春休みのツケが回ってきたのか、慣れない授業についていくだけで精一杯だった。このままでは駄目だと思い、二年生になってからは、勉強のやり方を変えたり、細かい計画を立ててみたりなど、自分なりに頑張ったが、クラスメイトはもつと頑張っていた。勝手に自分とクラスメイトを比べて、自分の出来損ない具合を思い知った。そんな状況に私の心はついていくことができず、私は不登校になった。まさに人生どん底だった。三年生になってもなかなか学校に通うことができず、そのままズルズル過ごしていると、高校に内部進学できないと担任の先生に

言われてしまった。全てのことにやる気が起きなかった私は、通信制高校か定時制高校、勉強する必要がなさそうな入りやすい全日制高校に通えはいいと、軽く考えていた。

しかし、この本を読んで自分の考えは間違えていると思った。未来を諦めたから今の高校に進学しようと考えたのではない。未来を諦めきれず、自分自身頑張りたいと思えた学校であったからだ。

きっとこの本に出てくる科学部の四人も、他の生徒も、未来を諦めきれないため、都立東新宿高校の定時制に入学したのだと私は思う。そして、未来を諦めきれないということは、自分の可能性を信じているとも言えるだろう。自分の可能性、そして仲間の可能性を信じてその気になりさえすれば、科学部の四人のように、大きな目標を成し遂げられるということ、そこから未来に繋がる光も差し込んでくるということを学んだ。

私は、四年制大学への進学を諦めたくないし、決して妥協もしたくない。そのためには、乗り越えなければいけない壁が立ち上がることもあるだろう。その壁を乗り越えられる可能性が、たとえパーセントに満たなくても、私は自分のことを信じ続けるし、今までの受験や、学校生活を支えてくれた両親という心強い味方が、一番近くで私のことを信じてくれていると思っている。しかし、未来が見えなくなると自分の可能性信じられなくなるときもいつかきつとくるだろうし、私と同じような経験をして、自分の可能性信じられなくなっている人もいるだろう。そんなときは、この本の最

後のページを開けてみてほしい。そこに書かれているのは、目標を成し遂げた岳人の次の言葉がある。「その気になりさえすれば、何だってできる」この言葉を合言葉に、自分の可能性を信じて、思い描く理想の未来まで踏ん張って頑張ろうと思う。

そして、今までずっと私の可能性を信じて支えてくれている両親に、感謝の気持ちを伝えたい。

伊予原新 著『雷わたる教室』（新潮社）

自由読書

世界一孤独なクジラたち

奈良県立香芝高等学校 三年 鈴木夏菜

海に響く歌声。五十二ヘルツのクジラは同じクジラの仲間たちにも聞こえない周波数で歌を歌う「世界一孤独なクジラ」。かつて家族に人生を搾取されてきた女性・貴瑚と、母親に「ムシ」と呼ばれる虐待を受けた少年。孤独の中で死んだように生きる二人が出会う物語。私はこの文章に引き寄せられ、本を手にとった。

「誰にも届かない五十二ヘルツの声を聴く。いつだって聴こうとするから、だからあなたの、あなたのたりの言葉で話した。全部受け止めるよ。」私が一番心に残ったセリフだ。母親からの虐待に耐え切れず家を飛び出してきた少年が貴瑚の家を訪ね、MP3プレーヤーで五十二ヘルツのクジラの歌声を聞きながら声をあげ泣いていたとき、貴

瑚が少年にかけた言葉である。人は、誰にも届かないと思って発した声を、たったひとりに聴いてもらうだけで生きる希望が生まれるのではないだろうか。私も日常で辛いことや悲しいことがあった時、一人で抱え込んでしまいそうになる。しかし、そんな感情が行き着く先はネガティブな考えである。暗い感情を抱えたまま思いついた解決法は、大抵現実的ではない。ところが起こった出来事や気持ちを持ち家族や友人に話すだけで暗い感情に光が差し、たとえ解決法が見つからなくとも心が穏やかになる。人は希望が見えると強く、前向きになれると感じる。

この物語の登場人物は、全員が何かにぶつかり、もがきながら生きている。そんな中で、魂の番”と呼ばれる人と出逢い、支え、支えられているのだ。しかし、本当に聞かなければならない声には気づかず、後で気づかなかった自分を憎み、心に消えることがない傷を負う。自分しか見えず、支えられるばかりで、相手を支えることができなくなる。そして相手の重荷になってしまう。きっと多くの人が支える側も支えられる側も経験しているだろう。冷静な時、頭では支えたいと思っても、知らぬ間に誰かに寄りかかっているかもしれない。

現代はインターネットで、誰もが簡単に自分の意見を発信できる。そのせいで様々な人の意見がそこらじゅうにあふれており、それらに振り回されてしまっているのではないか。故に身近な人の、大切にしたいはずの言葉を、捕まえ損ねることが増えたような気がする。生きている誰もが、誰にも

届けることができない五十二ヘルツの声を発し、この世界でもがきながら生きている。そんな中、自分と似た悩みを抱えていそうな雰囲気の人に惹かれ「助けたい」という気持ちで歩み寄る。しかし中途半端に近づけばその気持ちは相手にとって迷惑なものになり、偽善になってしまうかもしれない。だからこそ常に五感を研ぎ澄ませ、自分に必要な音を拾わなければならないのだ。ときには必要な音を拾いきれず、生涯消えることのない傷を背負うことになるかもしれない。その傷が増えるたびに人は愛を欲し、より深く人との繋がりを求めるのだろう。人は矛盾の中で生きている。人間関係で受けた傷は、結局人間にしか癒やすことができないのではないか。また傷つくことを恐れながらも、その傷を癒やしてくれるかもしれないと期待してしまうのだ。そして自分の過ちを悔やみながら、次こそはと、もう一度立ち上がり生きていく。そうするためには、社会の多数派の声に溺れず、目の前の相手としっかり正面から向き合わなければならない。自分なりの誠心誠意をもって。

読み終わった後、虐待やヤングケアラー、LGBTなど、簡単に触れることができない深刻な内容に胸が苦しくなり、虚しさや疲れがどつと押し寄せた。しかしそれと同時に、人々の繋がりがや登場人物個々の在り方からじんわりと温かいものが伝わってきた。この本に出会えて良かったと思う。孤独を感じながら生きていても、この世界のどこかに自分の声を聞いて理解し、愛してくれる人がいるのだと希望をもたせてくれた。どこからともなく

湧き出た噂話や偏見、固定観念に囚われず、振り回されることが大切なのだと改めて実感することができた。

人生の選択の正解は誰にも分からないし、きつと答えはない。誰もが自分の選択によって残った傷跡を抱えながら生きている。また、一番声を届けたい人に届かない時もある。一番大切にしたい人の声を受け止めきれない時もあるだろう。けれどきつと、自分の声を誰かが聞いてくれていて、誰かの声を受け止めることのできる自分がいる。そう私は、信じている。大きな身体で孤独ながらも優雅に泳ぐクジラのように、心穏やかに誰かの発した声に耳を傾け、自分も声を発し、人との関わりを感じながら、この世界で必死に生きていきたい。

町田そのこ 著『52ヘルツのクジラたち』（中公文庫）

審査概評

〈小学校〉

低学年では、入選作品は、書き出しの部分で自分がこの本を読んでどんなことを伝えたいのかということがよくわかる作品であった。また、本に書かれている内容を自分自身の生活にあてはめて自分ごととして自分の言葉で心情を書き綴っている作品が多く、共感をもった。みずみずしい感受性があり、本に真っすぐに向き合っていると感じた。

中学年では、本を読んで知ったことを、自分の生活に重ねてみることで、新たな考えが生まれたり、新たな気づきを得られたりしたことが伝わる作品が多く、またそれらを行動に移すなど、子どもたちの成長を感じた。自分の目線で感じた疑問や思い、考えが素直に表現されていた。しかし、「読書によって得た自己の変異」についての記述が全体的に弱く、本の内容に関する記述の割合が多く、児童の考えが少ないものが多いのは、残念であった。そんな中で入選作品は、自分の言葉で表現し、発達段階に応じた表現であり、好感が持てた。自分の経験を自分の言葉で書いていくことを大切にしていきたい。

高学年では、災害や戦争をテーマに、同年代の子ども達が登場する作品が多かったことから、本の内容と自分や家族の経験を重ね合わせ、自分が共感できたことを作文に表現することができていた。日ごろから感じていることや興味のあることに関する本を手にとっているので、自分自身の生活や体験を重ね合わせ本の世界を楽しんでいる姿が表現されていた。読んで感じたことからさらに思いを広げたり深めたりして、これからの生活や生き方に決意表明をする文も多くみられた。選んだ本が学年相当ではなくて、難しいテーマである場合、内容から離れた文章になる傾向があり、選書の難しさを感じた。

〈中学校〉

本年度より募集要項に「本コンクールに学校として参加するかどうかは各校の判断に委ねられています。」の文言が入った影響で参加学校数は少なくなったが、最終審査に残った作品は例年に比べ自分の意見や感想を自分の言葉で率直に述べている作品が多くみられた。特に、現在社会が直面する「戦争と平和」について記述する作品が多くみられた。これは生徒たちが現代社会の抱える大きな課題に対する関心の深まりの影響であると考えられる。今後、生徒たちには直面する課題に向き合う作品だけでなく、明るい将来に目を向けた作品を通じて夢や希望の満ちた将来像を思い描いてもらいたいと考える。また自己の変革について具体的に表現している作品を期待したい。

〈高等学校〉

課題読書については、定時制高校や韓国の高校を舞台に学ぶことの本質が描かれており、どの作品も、自らの生き方に重ね合わせて読書によるこびが感じられる作品であった。自由読書については、高校生という年代にふさわしい本を選んでいくかという「選書」の観点を選考においてポイントの一つとしている。多様な視点から作品を評価した上で、選考の決め手は三点ある。作品に描かれている事象の羅列だけでなく、その事象に対する自らの見解や感想を独自の視点で適切に述べられているか、また、読み手を意識して論を展開しているか、さらには、その本と出会うことで自己の変革がみられるかという点を基準に選考した。二次審査に残った作品については、どの作品も概ね著者の思いを的確にとらえ、それに対する自らの考えを論理的に展開しており、高校生という発達段階にふさわしい作品であった。読書を通じて、自己の変革を俯瞰的に見つめ、今後の生き方にいかしていくことを期待する。

第 42 回読書感想画奈良県コンクール

優 秀 賞

	指 定	自 由
小 学 校 低 学 年	<p>「おばあちゃんとルイーダ」 大和高田市立磐園小学校 1年 泉 川 大 和</p> <p>『ネコになったかかったクモのルイーダ』 ミシェル・ヌードセン 作 ケビン・ホークス 絵 福本友美子 訳 岩崎書店</p> 	<p>該当なし</p>
小 学 校 高 学 年	<p>「クモを追いかけて」 斑鳩町立斑鳩小学校 5年 伊佐地 由 芽</p>  <p>『すごいぞ！クモの探偵団』 谷本雄治 作 羽尻利門 絵 あかね書房</p>	<p>「世界を花いっぱいにする」 桜井市立城島小学校 5年 井 田 楓 夏</p>  <p>『みどりのゆび』 モーリス・ドリュオン 作 ジャクリーヌ・デュエーム 絵 安東次男 訳 岩波書店</p>

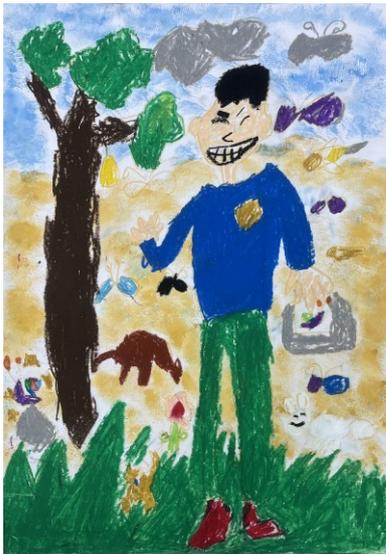
第 42 回読書感想画奈良県コンクール

優 秀 賞

	指 定	自 由
中 学 校	<p>「Respect for life」 奈良教育大学附属中学校 2年 天 方 美櫻里</p>  <p>『レッドリスト・プラネット： 野生生物を守り、地球を救うために』 アンナ・クレイボーン 作 大山泉 訳 評論社</p>	<p>「楽しい時間と深い紅色のジャム」 奈良教育大学附属中学校 1年 大 西 叶甫子</p>  <p>『西の魔女が死んだ』 梨木 香歩 作 新潮社</p>
高 等 学 校	<p>「変化と継承」 奈良県立奈良高等学校 1年 石 川 紡</p>  <p>『夜空にひらく』 いとうみく 作 アリス館</p>	<p>「退屈」 奈良県立磯城野高等学校 2年 供 田 理 子</p>  <p>『退屈をあげる』 坂本千明 作 青土社</p>

第 42 回読書感想画奈良県コンクール

優 良 賞

	指 定	自 由
小 学 校 低 学 年	<p>「こたろうがかたつむりを にじいろにした!!」 平群町立平群南小学校 1年 高橋 奏 翔</p> <p>『まほうのアブラカタブレット』 如月かずさ 作 イシヤマアズサ 絵 P H P 研究所</p> 	<p>「よろこびのひかり」 奈良市立朱雀小学校 2年 石 井 称乃果</p>  <p>『よろこびのひ』 いもとようこ 作・絵 ピーター・ミルワード 訳 女子パウロ会</p>
小 学 校 高 学 年	<p>「みんなでかなでている」 宇陀市立大宇陀小学校 4年 岸 本 雛 花</p>  <p>『ブラックバードの歌』 カチャ・バーレン 作 千葉茂樹 訳 あすなる書房</p>	<p>該 当 な し</p>

第 42 回読書感想画奈良県コンクール

優 良 賞

	指 定	自 由
中 学 校	<p>「戦いながら生きる」 田原本町立北中学校 2年 木村 まいる</p> <p>『死の森の犬たち』 アンソニー・マゴーワン 作 尾崎愛子 訳 岩波書店</p> 	<p>「青だけの世界」 奈良教育大学附属中学校 1年 藤島 円 真</p>  <p>『日本語を味わう名詩入門 (10) 丸山 薫・三好達治』 萩原昌好 作 水上多摩江 絵 あすなる書房</p>
高 等 学 校	<p>「煌めき」 奈良県立高田高等学校 1年 坂田 彩 音</p> <p>『夜空にひらく』 いとらみく 作 アリス館</p> 	<p>「希望の炎と不安の靄」 奈良県立橿原高等学校 1年 片岡 和</p> <p>『吉原裏同心』 佐伯泰英 作 光文社</p> 

奈良県学校図書館協議会役員名簿

【奈良県学校図書館協議会】

会長 浅井信成 (真美ヶ丘西小)
 副会長 石澤竜義 (高取国際高)
 理事 海老毅 (鹿ノ台中)
 事務局長 米田美穂 (真菅北小)
 事務局次長 茅田杏子 (高取国際高)
 会計 磯田雅子 (旭ヶ丘小)
 事務局員 田中瞳 (金橋小)
 谷口隆紀 (平城小)
 寺田澄子 (鹿ノ台中)
 中西渚 (桜井中)

榊 京子 (郡山西小)

前田裕子 (二上小)
 辻美月 (郡山西小)
 杉本幸恵 (新庄中)
 中埜敦子 (高取国際高)

高島香織 (磐園小)
 車谷由記子 (新庄小)
 清水明香 (生駒中)

【奈良県学校図書館研究会】

会長 榊京子 (郡山西小)
 副会長 浅井信成 (真美ヶ丘西小)
 理事 海老毅 (鹿ノ台中)
 会計監査 川田朋子 (陵西小)
 事務局長 田中瞳 (金橋小)
 副事務局長 前田裕子 (二上小)
 事務局員 米田美穂 (真菅北小)
 清水明香 (生駒中)
 辻美月 (郡山西小)
 五十嵐和弘 (青和小)
 常盤陽子 (井戸堂小)
 古川奈保子 (生駒南第二小)
 谷口亜由紀 (田原本町立東小)
 久保田禎一 (桜井東中)

西山卓 (広陵北小)
 原宗史 (河合第一中)
 杉本幸恵 (新庄中)
 磯田雅子 (旭ヶ丘小)
 中西渚 (桜井中)
 車谷由記子 (新庄小)
 丸本佳則 (登美ヶ丘中)
 松塚佳也 (天理北中)
 依田麻衣子 (鹿ノ台中)
 村井亮 (田原本中)
 谷聡 (菟田野小)

高島香織 (磐園小)
 谷口隆紀 (平城小)
 塚隆宏 (やまぞえ小)
 榊京子 (郡山西小)
 前田雅起 (平群南小)
 松室明夫 (纏向小)
 上野貴史 (曾爾小中)

【奈良県高等学校図書館研究会】

小学校部会 幹事
専門委員

中学校部会 幹事
専門委員

会長
副会長
事務局
監査委員
幹事

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------------|-----------------|--------------|---------------|---------------|--------------------|---------------|---------------|-----------------|-----------------|-------------|-------------|---------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|--------------|---------------|--------------|-----------------|-----------------|
| 寺本彩子 (郡山高) | 西本達也 (聖心学園中等教育) | 新堂眞子 (香芝高) | 大畑哲 (大和中央高) | 佐圓茉莉子 (郡山高) | 村田昂大 (十津川高) | 多田杏子 (高取国際高) | 河合知子 (奈良北高) | 石澤竜義 (高取国際高) | 東佳栄 (奈良教育大学附属中) | 古文章 (白鳳中) | 山内周 (畝傍中) | 赤井奈央 (上中) | 米田悦子 (富雄中) | 寺田澄子 (鹿ノ台中) | 中村竜也 (御所小) | 榊井沙耶佳 (新庄小) | 松尾陽子 (片塩小) | 志野幾子 (三宅小) | 福岡剛 (俵口小) | 阪本さやか (三和小) | 丸西直樹 (十津川第二小) | 原宗史 (河合第一中) | 浅井信成 (真美ヶ丘西小) | 早川賀英子 (畝傍東小) |
| 杉村敏 (五條高) | 石川美江 (奈良高) | 山本眞弓 (高田高) | 梅澤美津保 (王寺工業高) | 山中優弥 (法隆寺国際高) | 下仲一功 (智辯学園奈良カレッジ高) | 中埜敦子 (高取国際高) | 松田雅彦 (香芝高) | 角田哲典 (明日香小・聖徳中) | 植平舞 (天理市立西中) | 森貴子 (上牧中) | 隅村麻由 (高田中) | 岡岡步 (田原本町立北中) | 植平舞 (天理市立西中) | 安井愛奈 (天川小中) | 関珠美 (上牧第三小) | 清水安華 (三和小) | 浅田彩乃 (畝傍東小) | 岡田愛 (生駒小) | 恒岡夕貴 (平城小) | 山田真路 (吉野小中) | 蓮尾雅人 (葛城小) | 岡島眞寿美 (當麻小) | 角田哲典 (明日香小・聖徳中) | 角田哲典 (明日香小・聖徳中) |
| 三宅和恵 (生駒高) | 土代美香子 (智辯学園高) | 村岸輝典 (大和広陵高) | 三輪光二郎 (西和清陵高) | 三輪光二郎 (西和清陵高) | 三輪光二郎 (西和清陵高) | 三輪光二郎 (西和清陵高) | 三輪光二郎 (西和清陵高) | 川田朋子 (陵西小) | 梶井伊佐子 (郡山南中) | 吉田さやか (葛上中) | 高松葉司 (高田西中) | 畦田真央 (斑鳩中) | 梶井伊佐子 (郡山南中) | 真鍋万緒 (葛城小) | 長谷川美幸 (三和小) | 川野愛実 (畝傍南小) | 橋立千賀子 (平群小) | 加藤沙世子 (柳本小) | 杉崎明子 (五條東小) | 吉田千賀子 (広陵北小) | 川田千賀子 (広陵北小) | 川田千賀子 (広陵北小) | 川田千賀子 (広陵北小) | 川田千賀子 (広陵北小) |